

# ヨハネによる福音書 連続講解説教

始・二〇〇九年一月四日

至・二〇一二年九月一六日

辻 幸宏

本説教集は、二〇〇九年と一二年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思ひ、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ヨハネによる福音書は、四福音書の最後に位置し、他の三福音書（共観福音書）とは趣が異なります。一方、ヨハネの手紙（一と三）、ヨハネの黙示録と同一の著者であると考えられており、それらを参照して頂ければと願います。個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊

公同書簡一 ヤコブの手紙

公同書簡二 ペトロの手紙一

公同書簡三 ペトロの手紙二

公同書簡四 ヨハネの手紙・ユダの手紙

ヨハネの黙示録

二〇二一年一月

辻 幸宏

## I 福音書としてのヨハネ書

今日からヨハネによる福音書を、礼拝説教において共に読み始めます。

福音書は新約聖書に四つ記されていますが、ヨハネによる福音書は、他の福音書と比べましても独特の雰囲気があるかと思えます。それは他の三つの福音書が共観福音書と言い、マルコ福音書が最初に記され、それからマルコ福音書を参照しつつ、マタイ、ルカの両福音書が記されましたが、ヨハネによる福音書は他の福音書とは異なつた独特の切り口を持ちを持って記されているからです。

しかし、他の福音書と異なるからといって、私たちはヨハネ書が福音書であることを忘れてはなりません。そのことは、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」（二〇章三一節）と記されていることから明らかであり、「イエスが神の子メシアである」ことを語ることに福音書記者の狙いです。

## II 三位一体なる神

各福音書の書き出しにはそれぞれ特徴があります。それぞれ世にお生まれになつた人間イエスの神性を語るため、マルコは洗礼者ヨハネから、マタイはアブラハムの子孫であることから、ルカは処女降誕から語り始めます。

それに対してヨハネは「初めに言があつた」と語り、御子の永遠性から語ります。この御言葉は、明らかに創世記の最初「初めに、神は天地を創造された」（一章一節）を意識した言葉です。そして両者を比較することにおいて、言である御子が永遠の存在であることを確認することができます。

創世記は、「初めに、神は天地を創造された」と語り、そこから世界は始まります。そして天地万物は、六日間に渡り、神の言において、秩序正しく創造されていきます。しか

しヨハネは「初めに言があつた」と語る時、初めにはすでに言葉は存在していたことを語ります。時は主なる神が定めておられます。ですから、ヨハネは、言とは神の被造物ではないことを語ります。このことは、次の言葉によつて明らかになります。「言は神と共にあつた。言は神であつた。この言は、初めに神と共にあつた」。つまりヨハネは、この言こそが、神そのものであると語ります。

しかしここでは矛盾が語られているように感じます。一方では、言は神と共にあり、神とは別の存在として語られます。しかし次に、言は神である、つまり言は神として同一の存在であると語るからです。このことに対して、教会は、聖霊なる神を含め、父なる神、御子、聖霊の三位一体なる神として解釈してきました。ウエストミンスター小教理問五・六では次のように問答いたします（松谷好明訳）。

問五 ひとりより、多くの神がおられますか。

答 ただひとり、生ける、まことの神がおられるだけです。

問六 神性の内には、幾つの位格がありますか。

答 神性の内には、三つの位格、すなわち、父と子と聖霊があります。そしてこれら

つまり、一節の解釈は、次のとおりです。最初に言は神と共にあつたと語る時、この神とは、三位一体の第一人格である父なる神を示しています。一方、言は神であつたと語る時、この神とは、三位一体なる神そのものを語っています。ですから、聖書で「神」と語る時、私たちは両方を区別しなければならぬ時もあることに注意しなければなりません。

## III 創造と贖いの連続性

しかし私たちはもう一度、福音書の目的は、「イエス・キリストが神の子メシアである」ことを証ししていることを思い起こさなければなりません。私たちは、イエス・キリストが救い主であり、キリストの十字架に福音書の頂点があることを知っています。しかし、イエス・キリストのお働きは、肉において宿られた以降、特に十字架に限ることでは

ないということですが。三位一体なる神の第二位格の御子として、創造にも携わっておられます。つまり、天地創造に携わっておられる御子が、私たちの救済にも関わっておられます。私たち人間は、主なる神の創造に与り、昨日も・今日も・明日も主によって命が与えられ、救いにおける永遠の生命が与えられています。だからこそ、私たちは神を喜び、永遠に神に栄光を帰することこそが生きる目的であることが出来るのです（ウエストミンスター小教理問一）。つまり私たちは自分自身の存在は、すべてが主なる神に依存していることをしつかりと見つめなければなりません。

## 「私たちを照らす光」

ヨハネによる福音書一章四〜五節

二〇〇九年一月一日

### I 私たちの「命」、主のお語りになる「命」 その違い

今、私たちは命があり、生きています。毎日を何気なく暮らし、朝になると目が覚め、支度をして、学校や働き場に就くのではないのでしょうか。それが当たり前であり、当然です。こうした毎日が、特別祝福されているとか、喜ばしいことであると、特に考えることはないでしょう。しかし、私たちは病気になるったり、試練の中にある時、また身近な人の死に立ち会った時、命、生命を意識します。それは生かされている喜びである時もあれば、逃げ出したい・死にたいと思う人もあるかも知れません。生きたいけれども、苦しく、何をすれば良いのか途方に暮れる時もあるでしょう。

しかしヨハネは「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」と語ります。主がお語りになる「命」とは、言の内、つまり神の内にあると語ります。

ここで私たちは、立ち止まって考えなければなりません。私たちが語る「命」と、主がお語りになる「命」とは、同じであるのか、それとも異なるのか。私たちは、この両者に

はつきりとした違いがあることを理解しておかなければなりません。なぜならば、私たちが語る命とは、肉体を伴い、死を避けておこなうことができないからです。一方、永遠の存在である神の御子に命があります。それは永遠であり、死も滅びもありません。

このことは、主が万物を創造された時、「神はこれを見て、良しとされた」のであり、それは極めて良かったのです（創世記一章）。これはすべての被造物、私たち人間が、神の命に生きていたことを語っています。しかし私たちは今、死を避けて通ることができず、神の命に生きていません。これがヨハネのいう「闇」であり、私たちが支配する「罪」です。現在に生きる私たちは、産まれながらにして、また日々の生活にあって主の御前に罪を犯しています。それは、私たちが主の御前に行い・言葉・心において、主の聖・義・真実に従い得ないことです。それ故、私たちは主の命に生きることなく、罪の刑罰としての死を避けてとおることができない滅びへの道を歩んでいます。

また、主がお語りになる「命」は、皆が持つことができものではありません。つまり主を信じることなく、主がお示しになる「命」を受け入れなければ、真実の命を持つことはできません。つまり肉体的には生きていたとしても、主の御前では死んでおり、滅びに属するのです。

### II 御言葉によって獲得できる真実の命

しかし、私たちの今の命と、主がお示しになる永遠の命との間に断絶があるわけではありません。なぜならば「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」と主はお語りくださるからです。つまり主は、言、つまり御子イエス・キリストによって、言葉を発せられ、主が定められた真実の命を私たちにお示しくださっています。そして肉の死と共に神の裁きによる滅びに定められていた私たちは、真実であり永遠の生命である方を、御言葉によって知ることができ、また信じることにより、私たちが、真実の生命、永遠の生命に生きることができます。

しかし、永遠の命に与ることにより、肉の命も永遠になり、肉の死がなくなるわけでは  
ありません。キリストは人として地上の生涯を歩まれ、十字架の死を遂げてくださいまし  
た。そしてキリストは死に打ち勝ち、三日目の朝に甦りくださいました。神を信じ、永遠  
の命に入れられるキリスト者は、地上の生涯において肉の死を遂げても、キリストが復活  
してくださったように、復活の体が与えられる希望に生きることができません。  
しかし、「暗闇は光を理解しなかった」と記されます。多くの人々は、主によって示さ  
れている永遠の生命を求めようとも受け入れようともしません。人々から死の恐怖を忘れ  
させ、日々の生活、日々の享樂がすべてのように思いを向けさせる闇、つまりサタンの働  
きを私たちは忘れてはなりません。今、人々が生きることが真剣に考えている時代にあつ  
て、なおも真実の生命に目を向けることがないことが、その事実を物語っています。  
私たちは、この後、聖餐の礼典に与ります。私たちがこの聖餐に与ることは、私たちが  
キリストの十字架につながっているのであり、主がお示しくださっている命が与えられて  
いることを確認することです。主を信じることににより、私たちは永遠の死から解放され、  
神の命に入れられています。私たちは遅かれ早かれ訪れる地上の生涯を閉じ、つまり肉の  
死を迎えます。しかしそれと同時に、主は永遠の命の希望と喜びを私たちに与えくださ  
っています。主を信じることは、この希望に生きることができるとです。主によって与  
えられている永遠の生命の希望と喜びに満たされて、日々、歩み続けていきたいものです。

「神から遣わされた人」

ヨハネによる福音書一章六〜八節

二〇〇九年一月一日

序

一〜五節では、言としての御子が三位一体なる神として初めから在り、天地万物を創造

されたお方であることを確認しました。そして言としての神にこそ、真の命・永遠の命が  
あります。この真の命は、私たちが思っている命・地上の生涯とは異なります。私たちが  
神の持つておられる真の命に与るためには、主がお語りくださる御言葉に聞き、闇に光を  
あてなければなりません。

I パプテスマのヨハネとは？

六節では、神から遣わされたヨハネについて記されています。非常に唐突で、割り込ん  
だ形です。むしろ一八節の後ろに記した方が読みやすいでしょう。しかしこの部分にヨハ  
ネについて記したのには意味があります。「彼は光ではなく、光について証しをするため  
に来た」（八節）。つまり彼は御子ではありません。このことを記す理由は、福音  
書が記された当時（AD九〇年頃）、ヨハネが救い主であると信じている人々がいたから  
です。読者がここで記されている光はヨハネだと誤解しないために、早めにその誤った噂  
を打ち消したのです。

また、私たちが混乱してはならないのは、福音書の著者ヨハネとの関係です。ヨハネと  
は「主は恵み深い」と言う意味で、当時よく用いられていた名です。そして両者は別人で  
す。六節で記されるヨハネは、主イエスに洗礼を授けるパプテスマ（洗礼者）ヨハネのこ  
とです。彼は主からメシアの道備えを行う者として遣わされました。またこの福音書で  
「ヨハネ」と記されれば、多くの場合、この洗礼者ヨハネのことです。

一方、福音書記者ヨハネはそのような誤解が生じるとは思わずに、この福音書を書き始  
めます。と言いますのは、書簡に名が記されたのは後代です。福音書の中でヨハネは自身  
を語る時、ヨハネの名は記すことなく、「これらのことについて証しをし、それを書いた  
のは、この弟子である」（二一章二四節）と記し、「イエスの愛しておられた弟子」と呼  
ばれる最年少の弟子として記します。しかし文脈上、これは主イエスの使徒アルパヨの子  
ヨハネであることは知られており、後代に「ヨハネによる福音書」と呼ばれるようになり  
ました。

## II 道備えをする者

ではなぜ、神の御子が来られる前に、証しをする人が備えられなければならないか。天地万物を創造され、完全であられる主なる神に不可能なことはなく、御自身の口で真の神であることを語ることはできませんでした。しかしそうなさいませんでした。

それは私たち人間の側に、心備えを行うためです。人は突然、「私が救い主だ。信じなさい」と言われても、信じる事ができず、疑います。そのため主は、旧約の時代からメシアが来られる時には、その前に預言者を遣わすことを約束されていました（マラキ三章二三節）。そしてこのヨハネこそが、旧約聖書で預言されていた預言者エリヤです。

このように、主は御自身の大いなる御業を成し遂げるために、人間を遣わし、お用いになります。それは福音宣教も同じです。主は、キリストの十字架の死と復活の後、使徒たちに宣教を委ねられました。今も、福音宣教は牧師とキリスト者に委ねられています。

牧師である私自身、弱い人間であり、人を傷つけ、躓きの石であると感じています。そして主の御前には、行い・言葉・心において罪人です。しかし主は、こうした欠けのある人間を用いて、福音宣教を委ねておられます。それは主が、私たち人間を大切に思い、愛していただくさつているからです。もし主なる神が直接語られ、直接私たちの心に聖霊を通して働きかけ、私たちの心を変えるのであれば、私たちは、神のロボットのような存在になってしまいます。むしろ神は、人間同士の交わりにより、罪も弱さもあるが、その中に主の真理と愛が示され、救いによる真の光・命に与ることが信じる事ができるようになるように、私たちに福音宣教を委ねられています。

## III 証しをすること

ところで、ヨハネは証しするために来ました。証しとは、本来は裁判において証言をすることです。旧約の時代から非常に重要な意味を持っていました。偽証をすることにより、その人の人生を左右させることもあるからです。

しかし、いざ私たちの生活を見回しますと、偽証に満ちています。人によって語る言葉

を変え、朝語ったことと夕べに語ることが違うこともあります。駆け引きのために言葉が用いられ、真意を伝えないこともあります。「バレなければ嘘をついても構わない」、という風潮もあります。権力者ばかり、この国全体がそういった雰囲気漂っています。

ヨハネは、イエス・キリストを証しするために来ました。証しとは真実を伝えることです。自分の思い、考えによって変えてよいものではありません。ヨハネはまさしく、主なる神によって示されたとおり、救い主キリストが来られたことを、人々に、そして私たちに証しするために来たのであり、事実、彼はその働きをまっとういたしました。

万人預言者といわれますが、すでにキリストによる救いを受け入れた者は、キリストを証しするために立てられ、日々の生活により、また直接語ることににより、キリストを証しすることが求められています。キリストを証しするために真実を伝えなければなりません。そのために純粋な福音理解が求められます。また御言葉の真実を伝える時、それは同時に私たち自身が真実に生きることが求められます。私たち自身が真実に生きる時に、真実である主を証しする力が備えられます。

## 「神の子となる資格」

ヨハネによる福音書一章九〜一三節

二〇〇九年一月二五日

## I 「まことの光」と「闇」

ヨハネは、神の御子は言であり、光であることを語ります。抽象的ですが、主なる神を適切に表現する言葉です。通常、光が照らされると闇は消えます。しかし、闇は光を理解しません（五節）。闇闇が光を拒絶し、跳ね返したと言ってもよいでしょう。ちょうど私たちは、太陽が昇れば朝になったことを理解します。しかし、厚い雲がかかっていると、太陽が昇っても暗く、空はどよんでいます。罪はそのように光を覆い隠します。

ヨハネは「まことの光」と語ります（九節）。「まこと」の反対は「偽」です。つまり主なる神である「まことの光」が照らされているにも関わらず、同時に人によつて、神に似せて作られた光が人々を照らしています。偶像という光です。人々は偶像に惹かれて、信じます。人々はそれがあたかも真実の救いであるかのような錯覚を持つのです。人々は本物の光を知ろうとしません。井の中の蛙です。また、お金やブランド品も偶像となります。権力や地位も然りです。これらはこの世において自らを満たすものです。まことの光は、まことの命である永遠の命を示しますが、この世の物品や楽しみは、一時的です。そして物質的な反映はまさしく偶像と化します。しかし人は、そうしたちよつとした喜びに一喜一憂し、本当の光を追い求めません。本当は、真つ暗な中の薄明かりの中にいるけれども、光の中にあるような錯覚を持つのです。そして、人々にまことの光が輝き、まことの言が語られても、興味を示しません。だからこそ私たちは、①私たちが自身が暗闇の中にいることを知ること、②まことに光り輝く光を見つけ、偽物の光に騙されないことが必要です。

## II 救いを必要としている私たち

まことの光である神に対して、この世は暗闇です。それはなぜか、改めて考えてみます。最初の人は、神によつて創造され、神にかたどり、神に似せて造られました（創世記一章二六節）。それは、神の子として神の命に生きる人でした。続けて主は人と命の契約を結んでくださいます（二章一六―一七節）。しかし、最初にエバとアダムが神の御前で罪を犯し、彼らと彼らから生まれるすべての人が死に支配され、この世が暗闇に閉ざされることとなりました（三章）。

そのため、私たち人間は、生まれながらにして、罪の性質、その刑罰としての死を受け継いでいます。性悪説です。性善説や、中立な立場に生まれ、善いことも・悪いこともできるとする中間の説ではありません。

ですからヨハネは、神の子となる資格が与えられた人々は、「血によつてではない」

（一三節）と語ります。つまり私たちは皆、アダムとエバの罪を受け継いで生まれてくるのであり、神によつて救われる時には、このアダムとエバの罪から切り離される必要があります。ここの解釈をイスラエル民族との関係で考える神学者もいますが、ヨハネは言の永遠性から語り始めており、ここでもアダムとの関係、原罪に関して語られていると解釈した方が、文脈はすつきりします。

ヨハネは続けて、神の子となる資格は「肉の欲によつてもなく、人の欲によつてもない」と語ります。「肉の欲」と「人の欲」は同じことを指しているかと思えます。つまり、私たちは生まれながらにして罪をもつて生まれてきますが、日々の生活でも私たちは神の御前に罪を犯します。神の御前で聖書が語る罪は、行いによる罪だけではなく、口から発せられる言葉、心の中に思うことにも罪があります（ウエストミンスター小教理問八二）。そのいずれもが、神の御前では死に値します。

## III まことの光によつて生きる

しかし神を信じると、神の子となる資格が与えられ、神による救いに入れられます。それは驚くべきことです。そして神のすべてを相続することができます。生まれながらの罪からも、日々神の御前に犯してしまう罪からも解放されます。

しかし人はクリスチャンになつても罪を犯します。人も傷つけてしまいます。神を信じて神の子となることは、神によつて成し遂げられます。それは私たちが神の養子とされることによつてです。つまり肉的な罪の子として生まれてきた者が、父なる神を父とする神の子とされるのです。このことは同時に、私たちは神の御子クリストにつながることを意味します。クリストは人となり、地上の生涯を送られますが、言を語り、光を世に照らしてただけではありません。同時に、ユダヤ人の手で十字架に架けられ、死を遂げられました。クリストは神の御子であり、罪のないお方ですが、罪の裁きとしての死はクリストの十字架の死によつて償われ、私たちの贖いとなつてくださいました。

だからこそ私たちは、救い主イエス・キリストを信じた時、罪の故の死から解き放たれ、まことの光に照らされ、まことの命を得ることができません。無限・不変・永遠の霊である神によって、私たち人間は、神のかたどり、神に似せて作られた者として、神によって与えられる命に生きることが何よりの祝福です。

## 「神の恵みに生きる」

ヨハネによる福音書一章一四〜一六節

二〇〇九年二月一日

### I 肉を取られた言

ヨハネは、最初に「初めに言があった。言は神であった」と語り（一節）、続けて「言は世にあつた」と語ります（一〇節）。そして、今日のテキストでは「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」と語ります（一四節）。これは、マリアによる処女降誕のことです。しかしヨハネは、マリアの名も、聖霊によって神の特別な計らいによって身籠もつたことも記しません。ヨハネにとつて重要であつたことは、イエス・キリストがどのようにして人となられたかではなく、言であり光である神が人となられた事実です。

ヨハネが語る「わたしたち」とは、著者である使徒ヨハネを初めとする一二使徒とその周辺にいた主イエスの弟子たちのことです。彼らは人となられた御子の証人であり、その一人であるゼベタイの子ヨハネが、福音書を記しています。しかし、今この御言葉を聞く私たちの前にキリストは宿られたと読み取ることが出来ません。つまり、言であり光である神の御子が、世に下り、人となられた事実に対して、私たちは単なる見物人・傍観者ではなく、証人・当事者となることが求められています。

確かに私たちは直接、人となられたキリストを見ることはできません。しかしヨハネはトマスを前にした復活のイエスの言葉として語ります。「わたしを見たから信じたのか。」

見ないのに信じる人は、幸いである」（二〇章二九節）。つまり、人となられたキリストを直接見、聞いたから、証人となることができるのではなく、主が御言葉によってお語りになられていることを聞き、キリストを信じ、語られた御言葉を受け入れ、行われた奇跡の御業を受け入れる者は、御子が人となられたことの証人となることができます。

しかし、言である神が肉体を取り、人となられたことは、多くの人々にとつては躓きとなりません。それは、旧約聖書に通じ、約束のメシアを待ち望んでいるユダヤ人であっても、受け入れることができないことです。彼らはイエスをメシアとして受け入れることができず、「メシア」と名乗る不届き者として、神に対する冒瀆罪を適用して十字架に架けました。

また新約の時代となり、イエスの神性を受け入れて信じて、イエスの人性を否定する人々がいました。「仮現論」と言います。彼らは、体をもつたイエスを受け入れることができないうため、人間が目にしたイエスは幻の如き存在であり、イエスは終始、霊的な存在であり、肉体をもつことはないと言います。仮現論は、しばしばキリスト教グノーシス主義と結びつけられます。グノーシス主義では、「物質・肉体的なもの」と「霊的なもの」とを対立的に考え、前者は悪、後者は善と考えます。そのため肉と霊は相容れない存在であると考えます。そのためグノーシス主義においては、「イエスが神であるならば、神が劣悪な肉体をまとうはずがない」という教説が語られていました。

ヨハネが福音書を記した頃には、すでにそうした考えを持つ人々がおおり、ヨハネはそうしたことを意識しつつ語っています（参照・コロサイ一章二一〜二二節）。

一方、「言は肉となつた」と語る時、言が言であることを止めて、神が神であることを止めて、肉を取つたと解釈する人もいます。神である方が同時に人となられたことを受け入れることができないからです。しかしここで語られていることは、言は言のまま、神は神のまま、神は「肉の中に入った」のです。「受肉」です。これは、神である御子に肉が合成されたり、結びついたものでもありません。また半々にしたものをお合わせたものでもあ

りません。このように考える時、肉を取られた御子には栄光はなくなりません。半分の言には、栄光はありません。全き神が全きままで全き人になられたのです。まさしく「真の神にして真の人」である二性一人格を取られたのです。

## II 「栄光を見た！」 キリストの証言

またヨハネは「わたしたちはその栄光を見た」と語ります。言であり光である神が人となられたことを受け入れることは、同時に神としての栄光を受け入れることです。それを語るのが洗礼者ヨハネの証しです（六〇七節）。ヨハネは「神から遣わされた一人の人」です。神御自身が人となられたイエス・キリストは、真の光、真の神であると証しします。これは重要な証言です。そして洗礼者ヨハネは、「『わたしの後から来られる方は、わたしよりも優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである」と語ります（一五節）。さらに「その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履き物のひもを解く資格もない」とまで語ります（二七節）。当時、洗礼者ヨハネは人々から注目されていた預言者です。そして、ヨハネがメシアではないかとさえ言われていました。その洗礼者ヨハネをもってしても、わたしはその履き物のひもを解く資格もないとまで語る所に、御子の栄光が表れています。

また、主イエス・キリストこそが、真の神にして真の人であり、栄光の満ちた方であることを証しするのは、何よりも主イエスの弟子たち一二使徒です。彼らはイエス・キリストによって召され、直接、主イエスの御言葉を聞き、病人の癒しや超自然の奇跡が示され、何よりも主イエス御自身の死から復活の証人です。このことは、主イエスが復活の後、昇天された時、イスカリオテのユダに代わり、使徒を補充する時に語ったペトロの言葉によっても裏付けられます（使徒一章二一―二二節）。つまり、イエス・キリストの事実をずっと見て来たことが大事です（参照・一九章三五節）。つまり使徒は、キリストによって直接召され、直接遣わされた、人となられたキリストの証人となったのです。

## III キリストの恵みに生きる

一方、使徒ヨハネは「わたしたちは皆」（一六節）と語ります。この「皆」とは、主イエス・キリストの直接の証人である一二使徒や弟子たちの皆というよりも、神によって召し集められたキリスト者全員の意味が込められています。ウエストミンスター信仰告白第一二章「子とすることについて」では次のように告白します。「義とされた者たちすべてを、神は、その独り子イエス・キリストにおいて、また彼のゆえに、子とする恵みにあずかる者としてくださる。これによって彼らは、神の子たちの数に入れられて、神の子たちの自由と特権を享受し、……」。

つまり、真の言であり真の光である御子が人となられたことを証しすることができるのは、一二使徒を初めとする弟子たちです。彼らは直接、主イエスの栄光を証しし、主の恵みと真理に満ちたお方であることの証人です。

しかし、彼らの証しにより、今、この御言葉を聞く私たちもまた、真の言であり真の光である御子が人となられたことが示されました。御言葉により、キリストの栄光と、恵みと真理に満ちたお方であることを受け入れることができるのであり、この方の満ちあふれる豊かさの中から、救われ、永遠の生命に与る恵みの上に更なる恵みを受け取ることができるとされています。私たちは、直接、主イエス・キリストの見たたり、御言葉を聞くことはできません。しかし、御言葉により、真理が示され、恵みに満たされていることに感謝しつつ、同時に、主の証し人としての歩みを続けていきたいものです。

## 「仲保者キリスト」

ヨハネによる福音書一章一七―一八節

## 序 クリスチャンのイメージと実際のクリスチャン

神のことを知らない人たちのクリスチャン像とはどのようなものでしょうか？ 今は変

二〇〇九年二月八日



わってきているかも知れませんが、以前は「清く、正しい」と言ったイメージがある程度あったかと思えます。そこには、清く正しい人でなければクリスチャンになることはできないとの誤った認識もあつたかと思えます。

私たちの教会でも礼拝毎に十戒を朗読し、神が求めておられる戒めとは何であるかを確認しています。しかし私たちは、清く正しいからクリスチャンになれたのではなく、私たちは十戒を唱えつつも、行い・言葉・心の中において、主の戒めを守ることでできない罪人です。だから神による救いが必要です。

### I 律法と福音の関係

ここで問題となるのが、律法と福音、行いと信仰の関係です。この問題は、教会の中でも古くから議論されてきました。つまり、神の戒めを守ることでより救いが与えられるのか、神の救いが与えられその結果神に従う戒めが伴うのか、との違いです。

主イエスの時代のユダヤ人たちは、約束の救い主メシアを待望していました。しかし同時に、彼らはモーセの時代に与えられた律法を大切にしています。律法は、十戒を中心にモーセ五書に記されています。ユダヤ人たちは、熱心に律法を守っていました。「くねばならない」ことが中心です。そのため、彼らは律法をすべて守ることでより、救われるとの信仰に立っていました。

しかし、彼らの聖書解釈は誤りです。十戒には前文があります。「わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」。主がモーセに十戒をお与えになったのはシナイ山でした。しかし主は、モーセに十戒をお与えになるに先立ち、エジプトの奴隷として重労働が課せられていたイスラエルの民を、エジプト王ファラオから救い出してくださいました。主御自身が奇跡をお示しになり、イスラエルの民は主の御力による救いに与りました。つまり、主がイスラエルの民に律法を与えられたのは、主が救い主であり、一方的な恵みによりイスラエルを救ってくださいました後です。しかしイスラエルはその間後も罪を繰り返します。

### II 律法の三用法

ですから律法が救いの条件であることは否定されなければなりません。

律法には三つの用法があります。最初の用法は、善悪の規準です。神を信じていない人たちも、この律法を見ることにより、善悪の規準を知り、罪の抑制を行います。また、イスラエル人が律法を守れば救われる（参照・金持ちの青年、マタイ一九章一六〜二二節）と解釈したのも、この用法からです。

しかし私たちはこの戒めを、聖・義・真実である主なる神の規準で判断しなければなりません。主なる神は、私たちのすべてを知っておられます。つまり、私たちの行いばかりか、口から発せられる言葉、心の中で思うことすべてです。主の御前に立つ私たちは、律法により自分は罪人であることが示されます。これが律法の第二の用法です。このことを受け入れると、救われるためには、自らの罪を悔い改め、主なる神を理解し、神による救いを求めるしか道がないことが示されます。

つまり信仰とは、律法に従い、善き行いを行ったから救われるのではなく、私たちは主の御前に罪人であり、どうしようもない人間だけれども、神は、イスラエルをエジプトから救い出してくださいましたように、私たちも救ってくださいています。

そして信仰が与えられた者は、聖・義・真実の神に従う指針として、律法を用います。これがクリスチャンの善き業へとつながります。善き業は、神によって救われたことへの感謝の表れ、喜びの徴（しるし）です。これが律法の三番目の用法です。

### III イエス・キリストによる恵みと真理

ヨハネは続けて「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」と語ります。「恵み」と「真理」はキーワードです（参照・一四節）。

単に「恵み」と言っても抽象的な表現ですが、キリストによって現れた恵みと言えば、救いの恵みであり、永遠の生命の恵みです。イスラエルの民がエジプトの奴隷の状態にあった時、主の一方的な恵みにより救われ、奴隷から解放されました。そして私たちも、主

の御前に立つ時、罪人であり、罪の刑罰としての死を避けて通ることのできない者でした。しかし主の一方的な恵みにより、主を信じる私たちは、キリストの十字架による罪の赦しが与えられ、神の救いに入れられました。つまり、律法が与えられているからこそ、私たちは自らの罪を知り、神の救いの恵みを受け入れることができます。

一方「真理」は、聖・義・真実である神の内にあります。それがキリストによって現れました。イエス・キリストは神そのものですから、地上の生涯の間も、真理を貫かれ、罪を犯すことはありません。それは行いばかりか、言葉・心の中においても同様です。つまりイエス・キリストの言動が聖書によって示されることにより、私たちは神の真理がどのようなものであるかを知ることができます。そして、キリストによって神の真理を知った私たちは、キリストに倣い、神の義・聖・真理を行う者へと導かれます。

つまり、キリスト者として神に服従する時、私たちは主の律法により自らの罪を知り、悔い改めると共に、律法に従い、神の真理を行う者へとされます。こうしたキリスト者としての歩みが、結果として、キリストを証しする伝道へとつながります。

#### IV 仲保者キリスト

ところでヨハネは「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」（一八節）と語ります。私たちは今まで「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」との御言葉から聞いてきました。神には三つの位格があり、イエス・キリストは、神の第二位格、子なる神、御子、神の独り子です（ウエストミンスター小教理問六）。

私たちは、御子イエス・キリストが示されたからこそ、真の神を知り、真の救いを知り、永遠の生命を知ることができました。だからこそ私たちは、イエス・キリストを「仲保者（仲介者・新共同訳）」と呼びます。キリスト以外に、私たちが救い主である主なる神に出会う方法はありません。そして私たちは、イエス・キリストを知り、イエス・キリストの御業に出会うことにより、真の神を知り、救いを受け入れれます。イエス・キリストこそ

が、私たちに真の救いをもたらしてくださいました。私たちが本来担わなければならない罪の刑罰を、キリスト御自身が十字架に担うことによつてです。

この後、私たちが主の晩餐に与ります。まだ信仰を告白していない方々は、聖餐におけるパンと杯の配餐に与ることはできません。しかし皆さまが真に神の救いを受け入れて信じて、この交わりに加えられる日が来ることを願ってやみません。そして主の晩餐に共に招かれていることを覚えつつ、聖餐を見ていただきたいものです。

私たちは、聖餐式のパンを食す時、十字架に架けられたキリストの割かれた体を想起します。そして杯につがれたワインは、十字架で流されたキリストの血を想起します。そして私たちは聖霊の働きにおいて、キリストにつながれています。私たちが罪の死から救い出し、永遠の生命へと導いてくださった仲保者が、十字架に架けられ死を遂げられたのです。これは本来、私たちが負わなければならない、私たち自身の罪の償いを、キリスト御自身が担ってくださいました。神の御子がこの世にお生まれくださり、キリスト御自身が、私たちが救われるために十字架における苦しみと死を成し遂げてくださいました。主による救いに、感謝と喜びを持って、主がお語りくださる律法に従った歩みを、歩み続けていきたいものです。

#### 「ヨハネの証し」

ヨハネによる福音書一章一九〜二八節

二〇〇九年二月一日

#### 序

今日の御言葉では洗礼者ヨハネの証しが語られています。ヨハネについては、すでに六・七・一五節で語られてきましたが、キリストが来られるに先立ち、道備えをするために主によって遣わされた証し人でした。ヨハネの証しでキリストがどのようなお方であるか

を私たちは今日の御言葉において確認することが求められています。すでにキリスト者とされたクリスチャンもまたキリストの証し人であり、ヨハネの姿から、キリスト者とされた私たちの信仰生活とはいかなるものであるのかも一緒に考えて行きます。

## I 主を証しするエリヤとは

ヨハネは、メシア（キリスト）が来られることを語り、人々に悔い改めを迫り、人々に洗礼を授けていました。それも都エルサレムから遠く離れたヨルダン川の東の荒れ野（ベタニア）においてでした。しかしこの噂は、都エルサレムにまで広がり、それは人々がヨハネのことを神がお与えくださった預言者として尊敬していたからであり、ヨハネのことをメシアの如く思っていたからです。そのため、エルサレムにいた祭司とレビ人たちは、事実関係を確かめるため代表者をヨハネの所に遣わします。本当にメシアか、エリヤだと一大事だからです。

この時、ヨハネが彼らに対して最初に発した言葉は「わたしはメシアではない」です。ヨハネは自分がメシアとして見られること、新たな新興宗教の創設者と見られることを、初めに否定しました。ヨハネがメシアとして見られることは、神の栄光を汚すことになるからです。ヨハネは、自分はメシアを指し示す証し人であることを語ります。キリストを証しする人は、自ら神と等しい者であることを名乗ったり、自らを誇ってはなりません。ヨハネは主の御前に遜り、主の栄光を汚すことを避けました。

続けてヨハネは、エリヤであることを否定します。エリヤは旧約の偉大な預言者です。エリヤは、異教の神バアルの預言者たちと対決し、勝利を遂げました（列王上一七―一九章）。またエリヤは最後、主によって天に上げられます（列王下二章一節）。旧約聖書の中で、生きたまま天に上げられたのは、エノク（創世記五章二四節）とエリヤだけです。またエリヤについては、マラキ書で「見よ、わたしはおおいなる恐るべき主の日が来る前に預言者エリヤをあなたたちに遣わす」（三章三節）と預言されています。そのため人々は、メシアが来られる前に、偉大な預言者エリヤが遣わされることを信じていました。

そして、キリストが来られる前にヨハネが主によって遣わされました。ヨハネは旧約聖書が指し示すエリヤでした。そのことは主イエスも証ししておられます。「ヨハネについて、あなたがたが認めようとすれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである」（マタイ一章一四節）。またヨハネの誕生を語る天使は「彼はエリヤの霊と力で主を先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する」（ルカ一章一七節）と語ります。しかし、ヨハネ自身はエリヤであることを否定しました。ここから聖書は矛盾があると言われることもあります。なぜ、彼がここでエリヤであることを否定したのか？もし彼が自らエリヤであることを告白していたら、人々は、「エリヤのように奇跡を行いサタンに勝利する者」、「人々を天に導くために天から降りてこられた」等と空想し、期待します。また、ヨハネが実はザカリヤの子であることを人々が知ると、天から降りてこられたのではないことに躓きます。こうした無用な混乱を回避し、人々に対する悪影響を与えないために、ヨハネは自分自身がエリヤであることを否定しました。つまり、キリストを証しする時、人々が躓くことであれば、それを避ける配慮することが求められます。

さて続けてヨハネは、「あの預言者」でもないと言います。これはモーセのことです。これはモーセが「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない」（申命記一八章一五節）と語っていたことから、当時言われていたことです。ヨハネがああ預言者ではないと言ったことも、私たちはエリヤの時と同様の理由で解釈すべきです。

そしてヨハネは「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまつすぐにせよ』と」（二三節）と語ります（旧約聖書イザヤ書四〇章三節の引用）。イザヤ書四〇章は、イスラエルの民が自らの罪の故に主の裁きに遭い、バビロンに滅ぼされ捕囚の民とされていた時に、帰還の預言が語られた所です。ここでこの御言葉が引用されると言うことは、ヨハネの言葉を聞いているユダヤ人たちは、そして私たちもまた囚われ人であることを語ってい

ます。しかし祭司やレビ人たちは、エルサレムにおり、自分たちがイスラエルの民の宗教的指導者であるとの自負があり、囚われ人として解放される必要がある認識はありませんでした。しかしヨハネが道備えを行い、来られるキリストは、まさしく人々を罪の奴隷の状態・サタンから解放するためにこの世に来られました。私たちもまた、罪の奴隷の状態にあり、罪の死を避けて通ることのできない存在です。この私たちから罪を滅ぼし、サタンから解放し、救いと永遠の生命をお与えくださるために、キリストは来られたのです。このことを受け入れなければ、ヨハネを受け入れ、キリストを信じることはできません。この救い主キリストが来られることを、ヨハネは荒れ野で叫んでいます。丁度、災害が起れば、サイレンが鳴り響き、人々に危険を知らせますが、まさしくヨハネの言葉は、メシアが来られたことを人々に告げ知らせるサイレンです。

## II 洗礼を授ける

しかし、このヨハネの返答を聞いたファリサイ人たちは、ヨハネに対して改めて尋ねます。「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」(二五節)と。

旧約の時代、他の宗教では洗礼に似たものがありましたが、ユダヤ人たちは洗礼を授けることはありませんでした。ユダヤ人は割礼を受け、神の約束のうちにあることを確認しました。そのため、洗礼は特別なことを意味しているように取られていました。他の宗教では行われていますが、イスラエルにおいては、異邦人が信仰に導かれた時に、洗礼を受け、その上で割礼を受けていたようです。それ以外はほとんど洗礼はありませんでした。

また、ヨハネが授けていた洗礼による清めは、生涯で一回限りです。そのため厳粛に行われます。繰り返し行われる水による清めとは一線を画すものです。罪の赦しと救いによる永遠の生命につながりません。ユダヤ人たちは、「メシアでも、エリヤでも、あの預言者でもない者が、何の権威で洗礼を授けているのか」と問います。ファリサイ人の理解では、洗礼はメシアが来臨した時に行なわれるか、その直前にエリヤが来て行なうものであり、

終末的な出来事に関わる儀式でした。普通の人間が執行するものではないとの主張を持っていたのでしよう。ヨハネによる福音書では、この後、ファリサイ人が、主イエスに対して、洗礼に関して、水の清めに関して、問いたたすことが度々記されています。

ファリサイ人の質問に対して、ヨハネの答えは、質問に対する答えとはなっていない。しかしヨハネはここで、救い主イエス・キリストを指し示し、道備えをするために働いていることを語っています(二六・二七節)。つまり、ヨハネが洗礼を授けることができるのは、ファリサイ人たちがまだ知らない救い主による洗礼です。キリストは、ヨハネが「履き物のひもを解く資格もない」お方であり、栄光に包まれた方、神そのものです。ですから、ヨハネが洗礼を授ける時、ヨハネによって救いがもたらされ、約束されるものではありません。ヨハネが洗礼を授けるのは、イエス・キリストの名によります。つまりヨハネが授ける洗礼により、イエス・キリストによって罪の赦しを与えられ、救いが与えられます。ヨハネが指し示しているイエス・キリストは、初めから存在されている言である神です。永遠から永遠に存在される救い主イエス・キリストにつながるからこそ、救いが約束されています。

今のキリスト教会においても、自らの口で信仰を告白する人たちが、あるいはその子どもたちに対して、一度だけ洗礼を授けます。これもヨハネが授けていた洗礼と同じであり、直接的には主イエスのご命令によります。つまり、主イエスは十字架から復活されて、天に昇られる前に、弟子たちに対して、「あなたがたは言って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」(マタイ二八章一九節)とお命じになりました。洗礼により、父・子・聖霊なる神につながり、罪の赦しと永遠の生命の救いが約束されるという点では、ヨハネの場合と本質的に同じです。イエス・キリストによる救いを受け入れ、信じる者にはイエス・キリストによる救いがもたらされています。

## 序

いよいよイエス・キリストが登場します。しかし今日の御言葉において、主イエスは、何もお語りにならず、洗礼者ヨハネが主イエスを紹介します。主イエスは、神御自身ですが、自らが「救い主だ」・「メシアだ」と名乗られることはなさいません。ヨハネが主イエスを紹介しなければ、人々はイエスのことを救い主だと知ることができません。

私たちは、福音書を読む時、自然にイエス・キリスト像を造り上げていくかと思えます。絵画などでは、誰から見てもイエス・キリストであると分かるように描かれています。知性に満ち、権威を持っておられるイメージです。しかし、ヨハネから紹介されなければ、私たちもイエス・キリストを知ることができません。実際ユダヤ人たちは、受け入れることができませんでした。

## I 主イエスを指し示すヨハネ

そしてヨハネは主イエスのことを、「『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしは言ったのは、この方のことである」と語ります(三〇節、参照…一五節)。しかし一九〜二八節では、ヨハネ自身が「メシアか」と思われ、「わたしはメシアではない」と語っています。そのヨハネが、わたしにまさる方であると語ります。つまり、この方こそが旧約において約束されていたメシアであり、ヨハネが「その方の履物のひもを解く資格もない」(二七節)と語るお方です。それは、人間としての才能などの優劣でヨハネよりも勝っているのではありません。履物のひもを解くのは奴隷の仕事で、本来、雲底の身分のある証拠です。その価値すらもないとは、人間相互の関係には当てはまらない関係であるとヨハネは語っています。まさしくヨハネは、主イエスこそ、わたしよりも先におられた方、初めに神と共にあった(一章一節)神の御子であることを指し示しています。

そしてヨハネは、主イエス・キリストを人々に紹介しつつ、「わたしはこの方を知らなかった」(三一節)と語ります。どうして知らない相手を紹介することができなのでしょう。ヨハネの母エリザベトと主イエスの母マリアが親類でした(ルカ福音書一章)。幼なじみであったはずで、実際にヨハネと主イエスは互いに顔見知りであったでしょう。しかしここでの「知る」とは、顔や性格を知っていることではありません。ヨハネにとつては、主イエスの上に御霊が下り、留まるのを見るまでは、神の御子としてのイエスを知ったことになりません。ヨハネは「わたしは、『霊』が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た」(三二節)と語ります。これは洗礼者ヨハネが主イエスに対して洗礼を受けた時のことです。アルパヨの子ヨハネは、この時の詳細を語りませんが、他の三福音書では、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を授かったことについて記しています(マタイ三章一三〜一七節等)。この時洗礼者ヨハネは、イエスこそが、父なる神の御子、神の子であることを、はっきりと知ったのです。

## II 世の罪を取り除く神の小羊

前後しますが、ヨハネは人々に対して「見よ、(この方こそが)世の罪を取り除く神の小羊だ」と語ります(二九節)。旧約の時代から、人々は罪を犯した時、悔い改めをし、しとして、小羊の生け贄が献げられていました。罪人が神の子となり救われることはできませんので、罪の償いを動物の生け贄によって行って行っていました。旧約の民は、繰り返し小羊を主に献げ、罪の赦しを神に求める必要がありました。そのため、幕屋(後に神殿)において生け贄を献げるための規則が定められていました。そして旧約の民は、繰り返し傷のない牛、羊、鳩などを主に献げ、罪の償いを行いました。神の子であることを確認したので、また、イスラエルがエジプトにおいて奴隷であった時(出エジプト二章)、主はモーセを立て、イスラエルを救出してくださいました。この時、主はエジプト人を裁かれます。イスラエルの人々は、誤って主の裁きに遭わないように、しるしが求められました。それは、家の入り口の二本の柱と鴨居に傷のない一才の小羊の血を塗ることです。そして彼ら

は小羊を屠って食べました。罪の償いと同時に、裁きから逃れることができず。そのためイスラエルは、この逾越祭を毎年行っていました。つまり、小羊の生け贄は、神の民イスラエルにとつては、救いのしるしでした。

また屠らるべき小羊としてメシヤが来ると預言されています（イザヤ五三章七節）。そしてヨハネは、ここで預言されていた屠られるべき小羊こそ、主イエスであると語っています。

私たちは、主イエス・キリストが、屠られるべき小羊として生け贄にされる姿を、十字架において見ます。まったく罪がなく、真の神の御子である方が、十字架に架かり、苦しみ、死を遂げられました。これこそが、私たちの罪の償いとして、そして救いのしるしとしての生け贄です。キリストが十字架に死を遂げられたからこそ、キリストを信じる私たちの罪は償われ、神の子とされるに相応しい者とされました。

旧約の時代であれば、繰り返し小羊を生け贄にしなければなりませんでしたが、それはあくまでキリストの十字架を指し示すものであったのであり、旧約の民たちもまた、キリストの十字架によって初めて罪が完全に償われ、神による救いに与りました。しかし、キリストの十字架は、二〇〇〇年前、すでに成し遂げられました。ですから、私たちは、今改めて、小羊を生け贄として献げることが必要です。キリストを信じる者は、キリストによって罪の償いが完全に成し遂げられているからです。

### Ⅲ 私たちに引き継がれている洗礼

ヨハネは、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である（二三節）と語ります。主イエス御自身は、洗礼者ヨハネから洗礼を受けた時、聖霊によって父なる神とつながっており、神の子であることが示されました。

しかし通常、洗礼とは、神を信じた者が、水の清めに与り、罪の赦しの宣言を受け、神の子となるための儀式です。洗礼を受けることにより、聖霊によってイエス・キリストに、父なる神につながっていることを、確認します。

私たちは、キリストの十字架によって罪の償いが成し遂げられ、救いにあることを、御言葉によって確認した時、洗礼を授かります。キリストにつながり、父なる神につながることは、神の小羊の罪の贖いとしてのキリストの十字架につながることを意味します。私たちの犯す行い・言葉・心の中すべての罪がすべて赦され、神の子とされています。そして、神は聖霊を通して、常に私たちと共にいてくださいます。だからこそ、私たちが祈れば、主は必要を満たしてくださいます。試練をも乗り越える力を備えてくださいます。

## 「イエスに従う」

ヨハネによる福音書一章三五〜四二節

二〇〇九年二月二二日

### 序

クリスマスチャンは、イエス・キリストを救い主と信じ「イエスに従う」ことを告白します。今日、私たちに与えられた御言葉は、主イエスが宣教活動に入られて、最初の弟子たちと出会った場面です。ここから、私たちがキリスト者となり、イエスに従うとはどういうことかを、一緒に考えていきたいと願っております。

### I イエスの最初の弟子になれ！

主イエスは、洗礼者ヨハネと出会った時、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」

（二九節）と紹介され、「この方こそ神の子である」と、つまりヨハネはイエスこそが真のメシア、救い主であることを証しました。それは今までヨハネに従ってきていた自らの弟子たちに対しても向けられます。つまりヨハネの意図は、この方こそが、私があるあなたに悔い改めを解き、救いを求めるメシアとして指し示した方であり、「もう私から離れて、この方の下へ行きなさい」、とのメッセージです。そしてヨハネは、自らの身をこ

こで引き、主から与えられた働きは終わったことを語ります。ヨハネの二人の弟子たちは、

ヨハネの意志に答えるかのように、ヨハネを離れ、メシアである主イエスの下に近づいていきます。

他の共観福音書で、イエス・キリストの最初の弟子になったのは、シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネの二組の兄弟です。しかしヨハネ福音書では、ペトロの兄弟アンデレともう一人（この福音書の著者ゼベダイの子ヨハネ）です。ですから、最初の弟子としてアンデレとヨハネが挙げられていることに、違和感を覚えるかも知れません。また場所に関しても、共観福音書では弟子たちが漁師をしていたガリラヤ湖畔ですが、ヨハネでは、ヨルダン川の向こう岸ベタニヤです。その他にも違いがあります。

しかし、聖書には誤りがある、信じるに値しないと語ってはなりません。両者の着眼点が違うからです。つまりヨハネは、主イエスの弟子となり、神の救いに入ることに着目しており、共観福音書は、主イエスの使徒・同労者として召しに着目しています。ヨハネは、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を授かった翌日です。この時に、最初の弟子となる決心をしました。そしてその後、ガリラヤに戻った時、改めて、主イエスから使徒として、伝道者としての召しに与ったと解釈することもできるかと思えます。

## II 主イエスの所に留まる

さて次に、主イエスが二人の弟子たちに「何を求めているのか」と問われたことに対し、二人は「ラビ（先生）、どこに泊まっておられるのですか」と問い返します。「泊まる」とは、ヨハネが荒野で滞在していたことに対して、今日の宿泊を尋ねたと単純に考えてはなりません。もちろんそれもあります。主イエスの泊まっている所に伺い、一緒に語り合い、真のメシアである方がどのようなお方であるかを知りたいという思いがありました。主イエスに従い、付いていきたいとの意思表示です。しかし、ヨハネで住処を考える時、それは天国のことを考えなければなりません。洗礼者ヨハネが解き、弟子たちが求めていたものは、メシアによる救いです。そして彼らは切迫したメシヤ来臨の期待に燃えていました。つまり彼らはここで、永遠の住処である天国はどこですかと問うています。ここで

はこの答えは語られていませんが、ヨハネを読み進む時に、私たちは、この言葉がキーワードとなつていくことが次第に分かってきます。

この弟子たちの問いかけに対する主イエスの答えは「来なさい。そうすれば分かる」です。彼らは午後四時頃、宿泊先に着き、主イエスの話しに聞き入ったことでしよう。そしてこの方こそメシアであると確信しました。翌日、アンデレが兄弟シモンに対して「わたしたちはメシアに出会った」と語ります。同じように、主イエスは私たちをお招きくださいます。「来なさい」と。主イエスの所、つまり教会に集められ、そして主イエスがお語りになる言葉に耳を傾けることです。そうすれば、イエスコそが、私たちの救い主（メシア）であることが示されます。今聞いて、すべてが理解できるようなものではありません。今の時代、すぐに答えが求められます。しかしすべてを単純化して物事を考えることは非常に危険です。すべてを理解するために、時間をかけ、整理しつつ、理解を求めます。

## III メシアとの出会い

次に、アンデレの兄弟ペトロが続きます。アンデレは主イエスを信じた時に、真つ先に、兄弟シモンに伝道を行います。アンデレはシモンに「メシアと出会った」と語ります。「メシア」とはヘブライ語で「油注がれた者」の意で、ギリシャ語では「キリスト」です。イエス・キリストとは、氏名ではありません。イエスの一般的な呼び名は、「ナザレのイエス」（ナザレに住んでいたイエス）です。しかし、彼こそがメシアである、キリストであるとの称号が付けられ、イエス・キリストと私たちは呼びます。

神を信じる時は、神によって救いが与えられたことを受け入れることですが、救いの喜びに生きる時、親しい人に喜びを分かち合います。これが伝道です。救いの言葉がかけられた時、人々は不思議がります。拒絶されることもあるかも知れません。しかし、イエス・キリストにつながり、神による救いが与えられ、天国に住処が与えられた喜びに生きる時、周囲の人々の反応に右往左往させられることはありません。

また「メシアと出会った」と語る時、それは、有名人に出会うごとく、「嬉しかった」

で終わるものではありません。救い主に出会うことは、生き方そのものが変化します。救い主と出会った時、主イエスの弟子になり、主イエスに倣った生活へと変化します。この時、世との格闘も生じます。これは禁欲主義ではありません。しかし、この世における生活にどっぷり浸かっているならば、イエス・キリストに従うことはできません。必然的に生活に変化が伴います。変化を嫌いながら、キリストに従うことはできません。キリストに従う時、キリストがお招きくださる礼拝中心の生活へと変えられます。

#### IV シモン・ペトロ

最後に、シモン・ペトロについて確認します。シモンは、他の弟子たちと異なり特別でした。それはこの後のシモン・ペトロの教会における役割の故です。

第一に、主イエスは彼を「見つめます」。しばらくの間ジッと見られます。彼の過去と将来を見据え、シモンに対する支配と配慮をこめたものです。

第二に、「あなたはヨハネの子シモンである」と言われます。恐らく前の夜、兄弟アンデレからシモンのことを聞いていたことでしょう。しかし主イエスは、神であり、シモンのことのすべて、つまり心の中もすべて、過去・現在・将来を通じてご存じです。この神の統治が私たちにもたらされています。

そして第三に、「ケファと呼ぶことにする」と語られます。新しい名前は新しい存在であることを象徴します。ケファとは「岩」という意味のアラム語で、ギリシャ語で「ペトロ」です。主は、岩の上に倒れない教会を建てられますが、その象徴としての名がシモンに与えられました(参照・マタイ一六章)。

ペトロは主イエスの弟子としても特別な存在です。しかし、ペトロを含めここで記される三人の使徒たちが主イエスの弟子とされたことは、私たちがキリスト者とされたことと同じです。キリストの弟子として、今改めて、信仰を新たにしたいと思えます。

### 「見ずして信じないのか」

ヨハネによる福音書一章四三〜五一節

二〇〇九年三月八日

#### 序

今日、知らない人に着いていくことは危険が伴います。それが宗教であれば、なおさら不信感が伴います。こうした時代に「見ずして信じないのか」と言われても、人々には拒否されず。聖書はここで何を語っているのでしょうか？

#### I フィリポの入信

主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を授かった後、アンデレ、アルパヨの子ヨハネ、シモン・ペトロが、主イエスの弟子となり、主イエスに従っていきます。その翌日、フィリポは主イエスの「わたしに従いなさい」(四三節)との言葉に従い、弟子となります。フィリポが主イエスに出会って、すぐに信じて着いて行ったことは驚きです。しかしここには、前提条件がありました。第一に、彼は救い主を待ち望んでいました。熱心に祈りつつ、しるしを待っていました。第二に、フィリポと同郷であるアンデレとペトロがすでに主イエスを信じて、弟子となっていました。聖書が同郷であると語るのには、互いに知り合っていたからです。第三に、主イエスのメシア性です。主イエスが直接語られた時、聖霊により、メシアとしての姿が人々に示されました。もちろん、私たちは直接、神の子、メシアである方を、この目で見ることはできませんので、それがどのようなであったかを説明することもできません。しかし、フィリポはすぐに主イエスを信じ、証し人となります。

#### II ナタナエルとの出会い

フィリポは、ナタナエルに出会い、約束のメシアに会ったことを語ります(四五節)。それは、モーセの律法と預言者の書、つまり旧約聖書全体に語られていることです(参照・申命記一八章一八節、イザヤ七章一四節)。イザヤの預言は、受胎告知の時、天使によって預言が成就したことが知られます(マタイ一章二二節)。「見よ、おとめが身ごも



って男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。「この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

しかしナタナエルは疑います。当たり前前です。そして「それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」（四五節）とのフィリポの声に反応します。「ナザレから何か良いものが出るだろうか」（四六節）。この言葉は、ナザレに対する偏見です。都エルサレムからすればガリラヤ地方は田舎であり、その中でもナザレは田舎町でした。あのような田舎町からメシアが出てくるはずがないと思っただけなのです。

### III 主イエスとの出会い

しかし彼は、心を全く遮断することなく、フィリポと共に主イエスの所に行きます。それは彼自身が、フィリポ同様に救いを求め、メシアを待ち望んでいたからです。

しかし主イエスは、ナタナエルに会うや否や、彼を誉められます（四七節）。主イエスは、彼が真にメシアを求めている姿を心に留めました。「まことのイスラエル人」とは、偽りのイスラエル人と対比されています。多くのユダヤ人たちは、救い主メシアを待ち望むと語りつつも、真には求めていませんでした。そして律法を自らに都合の良いように解釈し、自らを誇り、人々を裁いていました。そのことを主イエスは偽善であると語ります。この時、ナタナエルの心は震えます。自分自身の心をすべて覗かれていたからです。人できないことを行うことができるお方を受け入れざるを得ない状態に置かれます。

さらに主イエスはナタナエルに語られ（四八節）、主イエスは彼に全知全能である主であることを示されます。そしてさらに主イエスは未来のことをもすべてご存じです（五〇〜五一節）。主イエスは、御自身の十字架と復活の後に起こることを示されます。ヨハネ二一章では、復活の主イエスが弟子たちの前に現れることが語られています。ここにナタナエルの名が記されています（二二章二節）。ナタナエルは主イエスの弟子として、主イエスの十字架と復活の時まで、主イエスに従いました。そして主イエスの十字架の死からの復活の重要な証言者の一人として、ヨハネはナタナエルを紹介します。このことは同

時に、彼がこの後にすぐに起こる主イエスが昇天をも見届けていたことを推測させます。主イエスはナタナエルの将来にわたるすべてのことをご存知です。この方が、私たちのために十字架に就いて主なる神は、私たちのすべてをご存じです。この方が、私たちのために十字架にお架かりくださり、救いを完成してくださいました。私たちは、フィリポやナタナエルのように、直接救い主に会うことはできません。しかし私たちは、神の御言葉である聖書に記された主イエスに出会うことにより、この方こそ真の救い主であることを知り、信じることができます。そして主は、イエス・キリストこそが真の救い主であると信じる者に、永遠の生命、神の国を約束してくださっています。

### 「最初のしるし」 ヨハネによる福音書二章一〜一二節

二〇〇九年三月一五日

#### I 授洗後の変化と移動

主イエスと弟子たちは、カナにおいて婚礼があり、そこに招かれていたため、ヨルダン川沿いのベタニヤからガリラヤに帰られます（一、二節）。主イエスの母マリヤも婚礼に招かれており、家族全体が招かれる親しい関係にあった人の結婚式であったと考えられます。ただ聖書には、新郎新婦が誰であったのか記しません。私たちが注目すべきなのは、主イエス・キリストだからです。

主イエスは、このカナにおける婚礼の宴において、最初のしるし、奇跡を行われます。当時、婚礼は約一週間続けられました。文化が異なる私たちからすれば、信じられないことですが、これが彼らの習慣でした。そのため婚礼を主催する人は、招待客の人数やメニューを確認して、十分なだけの食料と酒を準備しなければなりません。途中で食料や酒が足らなくなるなど、恥ですし、客人に失礼にあたります。

## II 主イエスの変化とマリア

しかしそうした中、ぶどう酒が足りなくなつたとの知らせが、母マリアを通して、主イエスの所に届きます。この時のマリアはそのことをイエスに伝えます。それは、子どもを信頼する母親の姿です。この時マリアは、イエスが主としての御業を始めたことを知り、このように語つたのでしようか。いや、まだ息子であるイエスが、神の御子であり、メシアとしてのお働きを始めたことをはつきりとは知ることができなかつたかと思ひます。

この時イエスは、マリアに対して、「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです」（四節）とお語りになります。非常に他人じみた言葉です。この時、主イエスとマリアとの関係は、親子の関係から、神の御子と一人の罪人の関係に変化しました。主イエスの態度は、明らかに洗礼を授かる前とは異なっていました。

さらに主イエスは「わたしの時はまだ来ていません」（四節）と答えられます。ヨハネで「時」は鍵になる言葉です（七章六節・八節・三〇節、八章二〇節、一二章二七節、一七章一節）。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのため、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができ「時」は一つの区切りで、宣教の働きを始めることとなりますが、一方、主イエスの「時」とは、御自身が十字架に架かられ、十字架の死と復活により、信じる人すべてに神による救いがもたらされる時のことです。

マリアは、聖霊の導きにより、主イエスにすべてを委ね「この人が何かを言いつけたら、そのとおりにしてください」（五節）と召使いたちに命じて、宴席に帰つて行きます。

### III 十字架を指し示すキリスト

一方で主イエスは、マリアの要求に対して応えられようとしています。これは、一人のキリスト者の祈りを、主なる神が答えてくださる姿です。奇跡の目的は、主イエスが神の御子、救い主として御力を人々に示す、宣教の御業です。そして苦しみ、嘆きの民を、神の御許に導き、永遠の救いへと招くことです。そのために主イエスは病人を癒し、罪人に罪の赦しを宣言されます。しかし最初のしるしは、奇跡が行われた人に直接、救いが示されることではありませんでした。

しかし、主イエスの最初のしるしとして水をぶどう酒に変えられたのには、理由があります。それは、主イエスが私たちを導いてくださるうとしている神の御国がどのような場所であるかを示されることです。聖書は度々、天国のたとえとして婚礼の宴会を用います。結婚そのものが喜ばしいだけでなく、宴会でのご馳走の飲み食いが、当時、貧しい生活をしていた人には、天国の喜びを髣髴させる具体的な譬えだったからです。人々は招かれてその喜びに浸ります。婚宴は当時の人々の社会生活の中で最大の喜びであつたからです。それと同時に、主イエスが水をぶどう酒に変えられたのは、大きな意味があります。洗礼者ヨハネは水で洗礼を授けていました。水は、体の清め・洗いを意味します。そして、洗礼は、現代の私たちにも受け継がれています。イエス・キリストを救い主と信じる者は、洗礼を授かりますし、その時、水の清めとして水に浸ります。

しかし罪の赦しのためには、罪の刑罰が支払われる必要があります。神の御子・救い主であるキリスト・イエスは、私たちのこの罪の刑罰を支払われるために、十字架にお架かりくださいました。主イエスが語られる「わたしの時」とは、まさに十字架に架かられる時です。そしてキリストは、十字架の上で、体が裂かれ、血を流されました。

私たちは、主の晩餐（聖餐式）において、パンを食し、ぶどう酒を味わうことにより、主イエス・キリストの十字架を想起し、キリストの十字架の贖いによつて、罪赦され、神の救い、永遠の生命の約束に生きていることを確認します。主イエスが、最初のしるしとして水をぶどう酒に変えられたのは、まさにキリストの十字架の血こそ、キリスト者としての生きる道、喜び、神の国の祝福があることを、お示しになられています。

## 序

私たちに取りまして神を礼拝する場としての教会こそが、神の宮です。宗教改革は、神の言葉の回復が求められ、聖書を自分たちの言葉で読めるように翻訳が始まりました。それと同時に、神を礼拝する教会が、神の宮として神の御言葉を聞くのに相応しい場となっているかが問われました。そして、マリヤ像や聖画など偶像につながるものは一切排除し、神の御言葉を聞くのに集中できるようにしました。これを裏返しに語ると、神の御言葉に聞き、福音に満たされなければ、臨在される主なる神による救いが、実感できません。それだけ御言葉の説教が重要な位置を占めることとなります。

## I 福音書の読み方

さて主イエスは、過越祭のためにエルサレムに上られます。つまり主イエスは宣教の最初と十字架に架かられる時にエルサレムに上られました。

今日取り上げました神殿から商人を追い出す出来事は、共観福音書では主イエスが十字架に架けられる直前の出来事とします。この食い違いに関して諸説あり、「二度同じことを行われた」と語る人もいますが、私は、共観福音書が語るとおり、主イエスが十字架に架かられる直前の出来事かと思っています。では、ヨハネは間違っているのか？福音書は、イエス・キリストの伝記ではなく、時系列通り記されていません。そのため時系列が異なるから、即、間違いと語ることとはできません。福音書毎に強調点が異なり、ヨハネは、イエスが神の子キリストであることを強調し、イエスの神性、十字架と復活との関係が最初から意識されて記されています。

ヨハネは、主イエスの最初のしるしとしてカナのしるしを記しました。主イエスが水から変えられたワインは、キリストの十字架の死を想起させ、神の国の聖餐共同体を意識したものです。そして、今日記されている所に、神の国における神礼拝とはどのようなものであるかが示されています。神が最初に人間を創造された時に、完全な服従を条件に、人間との間に命の契約を結ばれましたが（ウエストミンスター小教理問一二）、人は神との約束を果たすことができずに、罪の中、死の刑罰を避けて通ることができなくなりました。しかし主イエスは、死の刑罰を御自身が十字架に担い、神の民を本来の姿、つまり神の国における永遠に神の祝福に満たされた状態へと導くために、この世に来られました。そのことをヨハネは、最初から私たち読者に意識させます。

## II 神の宮 神礼拝を行う場

さてエルサレムの神殿の境内では、牛や羊や鳩を売っていました（一四節）。それは、神殿の前で生け贄を献げるための動物であり、認められていました。というのには、人々はそれぞれ住んでいる地域からエルサレムに上ってくるのであり、わざわざ生け贄の動物を引いてエルサレムに登ることが大変だったからです（申命記一四章二四〜二六節）。また、両替に関しても、当時はローマ帝国の支配下であり、ローマの通貨デナリオンが流通していました。しかし人々は神殿に行くために、イスラエルにおいて用いられていた銀の重さの単位シケルに両替することが求められました。従って、ユダヤ人たちがおこなっていた行為自体を、否定することはできません。

では、なぜ主イエスは、商人を追い出されたのでしょうか？彼らが商売をしていたのは神殿の庭です。商売自体は不正ではありませんが、金銭的なことは不正の温床となりやすいです。そうしたことが神礼拝が行われる礼拝の場に持ち込まれてはなりません。神礼拝と人間を相手にする商売とは別であり、次第に神礼拝の場が商売にすり替わってしまいます。宗教改革のきっかけは免罪符であり、死者の救いを売っていたことに通じます。

まさに商売が神礼拝の場に持ち込まれることは腐敗そのものです。主なる神の御前に、頭を

垂れる場所です。日々の生活から離れ、主が語られる御言葉に聞き、祈る場であり、キリストによる罪の赦しと神の永遠の救いの宣言を受け、喜びと感謝の内に一週間を歩む力の源とならなければなりません。その上で、キリストの教会を建て上げていくために、互いに奉仕します。

### III 神の宮 神の国に向けての神礼拝の場

一方、ユダヤ人たちは主イエスのおこなった行為に憤ります。ですから彼らは、主イエスが何の権威によつてこの様なことを行っているのかと、しを求めます(一八節)。それは主イエスが、神殿のことを「わたしの父の家」と語つたことにも一因があります。

「お前は、誰様なんだ」との思いです。

この時、主イエスは「この神殿を壊してみよ。三日で立て直してみせる」(一九節)と、御自身の十字架と復活を予告されます。福音書の記者ヨハネにとつて、主イエスの宣教活動は、あくまでも十字架と復活によつて成し遂げられる神の国に向いています。

ユダヤ人は、神に生け贄を献げるための神の宮としての神殿を大切にしています。ソロモンによつて築かれ、バビロン捕囚から帰還後再建します。そしてこの時代、第三神殿を完成させるために、工事が進められていました。しかし主イエスは、御自身の十字架の死と三日目の復活により、旧約以来行われてきた生け贄はもう必要なくなる、と語られます。旧約の時代、繰り返し動物の生け贄が献げられることにより、その都度、人々は罪の赦しを確認していましたが、キリストの十字架と復活は一回限り、信じる者のすべての罪の贖いです。ですから、主イエスが商人たちを一掃するという行為は、もう生け贄の時代は終了し、神の御子、メシアである主イエスに目をやりなさい、信じなさいと語っているのです。動物の生け贄は、あくまで約束のメシアであるキリストが来られる時まで行われることです。すべてはキリストの十字架に集中しなければなりません。まさしく神の御子でありつつ、真の人となられたキリスト・イエスだからこそ、すべての人の罪の贖いを成し遂げることが出来ます。

主イエスが神殿の庭において行われた行為を、弟子たちですらキリストの十字架と復活を待たなければ理解することはできませんでした。しかし私たちにすでにキリストの十字架と復活が御言葉によつて指し示されています。主による罪の贖いは完成し、神の国の到来の希望が示されています。だからこそ私たちは、神の国の希望に満たされつつ、神の宮である教会において、主の御言葉に集中して、神を礼拝し続けなければなりません。

### 「人の心の中を知る神」

ヨハネによる福音書二章二三〜二五節

二〇〇九年三月二九日

#### I 偽りの信仰

私たちは、イエス・キリストを救い主と信じるために、教会に集められています。しかし、「信じる」とはどういうことなのか？ 広辞苑で「信じる」を調べると「まことと思う。正しいとして疑わない。……」と記されています。私たちが通常、神を信じると語る時、それは私たち自身の行為として考えます。神を信じるのも、信じない、否定するのも、私たち自身の心次第だと思っています。

しかし同時に、信仰は神による行為です。つまり、私たちが「神を信じた」と語れば、一方的に救いが完成するものではなく、救い主である神と救いに与る私たちとの関係、契約を考えなければなりません。つまり、私たちが「神を信じた」と告白する時、私たちはどのような信仰にあり、神を誰と考えているのか、信じた神に対して私たちのあるべき姿はどのようなものであるのか、が問われてきます。

つまり私たちが「神を信じた」と告白しつつ、私たちの側だけが神に救いや幸福、試練からの脱却と言つたことを要求してはいけません。苦しみが与えられ、祈つたけれども、神は聞き入れてくださらなかったことで、この神はダメだということは言つてはなり

ません。私たちは、試練が与えられた時、なぜ主なる神が、この様な試練を与えられるのだらうかと、考える必要があります。主なる神による救いに入れられているならば、主が耐えられないような試練を私たちにお与えになることはなく、そこには私たちが信仰の成長を遂げるための意図が込められています（Iコリント一〇章一三節）。

主イエスは一時的・感情的な信仰の告白は、真実の信仰ではないと語られます（二三・二四節）。人々は主イエスの奇跡を見て、信じたつもりでした。しかし彼らの心は、一時的な思いでしかなく、真の信仰ではないことを主イエスは読み取ります。こうした偽りの信仰があることを信仰告白も語ります（ウエストミンスター信仰告白一八章一節）。

## II 私たちの信仰

では、真の信仰者とはどのようなものであるのでしょうか。私たちはどのような神を信じているのかを考えなければなりません。主なる神は、天地万物を創造され、今もすべてを統治しておられます。つまり自然を超えて働く奇跡・癒し・超自然現象すらも、主なる神は行うことができるお方です。そして主なる神は聖霊をとおして、今も私たちと共にいてくださいます。ですから、「神を信じた」と告白する時、それは自分の方で救いを獲得したのではなく、主なる神が一方的に捉えてくださり、「私を救いに導いてくださった」のです。つまり、私たちは「神を信じる」ことを考える時、私たちの個人的な感情に頼ってしまおうのですが、しかし主なる神の方では、天地万物を創造される前からある永遠の御計画の中に私たちの救いがあります。つまり、一人が、神を信じて、神の子となることは、神の偉大な御業です。

そして、主の偉大な御計画に入れられている私たちのことを、神はすべてご存じます。私たちの行い、言葉、そして心の中まで、神の御前に隠すことはできません。私たちの弱さ、罪深さ、汚れ、嘘、表面的な取り繕い、そうしたものも、神の御前には明らかになっています。神はこうしたことをすべてご存じの上で、「あなたを救う」と宣言してくださいます（ウエストミンスター信仰告白一八章一節後半・二節）。

## III 救われた者の信仰生活

そうであれば、私たちの信仰生活もまた、神の偉大な救いの御業の中に生きることになります。「今日は時間があるから、礼拝に行こう」とはなりません。私たちに罪の赦しを与え、私たちに永遠の救いをお与えくださったお方は、主なる神です。そのお方が、私たちを礼拝に招いてくださっています。私たちは弱く、罪深い者だからこそ、すぐに神の愛、神の救いの恵みを忘れてしまいます。しかし、主が私たちに礼拝に招いてくださることに、神の救いの恵みを忘れてしまいます。そして救いに導いてくださる神は、御言葉により私たちを養い、私たちの信仰は保たれます。そして救いにくださる神は、御言葉により私たちを養い、私たちの信仰を豊かにしてくださいます。だからこそ私たちは、礼拝中心、御言葉中心の生活へと変えられていくのです。私が神の救いを獲得したのではなく、神が私を愛し、救ってくださいました。感謝と喜びをもって、主に仕えていきましょう。

## 「新たに生まれる」

ヨハネによる福音書三章一〜八節

二〇〇九年四月五日

## 序

「人生をやり直したい」、「生まれ変わりたい」と思う人はいるかと思いますが、キリストを救い主と告白し神を信じることは、真の救い主によって救われた者として、真の人間性を取り戻した生まれ変わります。そのことを、教会では「新生」と語ります。

## I ニコデモの夜の訪問

さて律法学者ファリサイ派に属する議員であるニコデモが、主イエスの所に来ます。彼は夜になり、暗闇の中に「人間を照らす光が輝いている」と語り、主イエスの所を訪れます。ヨハネ一章では、この世に属する闇と、主なる神を示す光がコントラストに映し出さしており、ニコ

デモが夜、主イエスの所を訪ねたのは、彼が闇に属していたからです。ニコデモは（最高法院の）議員でした。身分が高く、人々から敬われていました。その議員が、人々からは軽蔑されていたガリラヤ人のイエスの所を訪ねるのであり、人々には見られたくない事情がありました。

それと同時に、夜という時間は、議論するには最適な時間です。誰も気にすることなく議論することができます。ニコデモは、イエスを師と仰ぎ、自分の疑問をぶつけようとしていました。現代のように、夜になっても、明かりがさんさんと輝いていることはありません。相手の顔すら臆気にしか見えません。長い夜、日常に働きから解放され、話し合うには最適の時間です。失った闇の静けさを、私たちは取り戻す必要もあるのではないかとともに思います。

## II 上から生まれる！

フアリサイ人は、救いを求め、神の国を求めていました。パウロもフアリサイ人でした。彼は、復活の主イエスに出会うことにより、真の救い主を受け入れ、信仰を告白して、キリストを証しする者へと変えられていきます。ニコデモも、その探求心があつたからこそ、夜、人目を盗んでまで主イエスの所に訪ねて来ました。ただ彼は、自らの口で信仰を告白するまでにはいたりません。信仰とは、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じ、口でイエスは主であると公に言い表すことが求められます（ローマー〇章九く一〇節）。

ニコデモの心を知っておられる主イエスは、彼に語りかけます。「はつきり言っておく」（三節）。これは「アーメン、アーメン、あなたに言う」です。ヨハネでは、主イエスが重要なことを語られる時、この言葉が繰り返されます。そして主イエスは「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（三節）と語られます。「新たに」とは「上から」です。つまり神によって生まれ変わらなければ、神の国に入ることはできません。しかしニコデモには理解できません。そして、彼は改めて主イエスに「年をとつ

た者が、どうして生まれることができるでしょう」（四節）と絶望に近い言葉を語ります。それはニコデモが自分の行いを積み上げることと神の国を求めていたからです。金持ちの青年と同じです（マルコー〇章一七節以降）。神の国を求める探求心はあるが、方法が間違っていました。今、主イエスの前に立ったニコデモは、自らの行いでは神の国には届かないことが示されました。そして主イエスは上から、つまり神によって生まれるほかないことを語ります。

## III キリストに結ばれる

フアリサイ人であるニコデモは、終わりの日に死人が復活することは信じていました。しかし、この世に生がある間に新たに生まれることを理解することはできませんでした。頭だけの理解で、信仰が伴っていないからです。これがニコデモの躓きです。

ヨハネ一章にはラザロの死が記されています。ラザロが死んで四日して、主イエスはベテニアを訪ねられます。そして主イエスは、ラザロの姉妹マルタに「あなたの兄弟は復活する」と語られます（二三節）。マルタは「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と答えます（二四節）。主イエスは今日、現実を起こる甦りの出来事を語っておられるのに、マルタは終わりの日の甦りの教えことと考えて返事します。マルタの言うのは教えられた教理の知識ですが、主イエスの求められたのは信仰です。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」（二五節）。主イエスが語られたことは、彼方のことではなく、今、私を受け入れて信じ、私において今ここに驚くべきことが起こるのを信じるか、と問われたのです。それに対してマルタは「はい、主よ、わたしは信じております」と答えます。この時、彼女の中に新しい現実が始まります。

ニコデモの場合も似ております。頭の中では復活を理解していましたが、今、神によって新たに生まれること、生まれ変わることを理解できませんでした。また、信仰を

持てば、自然と気分が改まるものでもありません。エゼキエル書三七章には、枯れた骨に向けて御言葉が語られると、骨が連なって肉がつき、皮がはり、人間の形ができることが記されています。しかし、まだそこに息はなく、命はありません。そこで、預言者は息に預言して、「霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る」（九節）と語ります。すると息が体に入り、人々は立ち上がって大群衆となります。この息こそ、御霊の息吹です。

では、私たちはどのようにすれば新生が与えられるのでしょうか。キリストの十字架と出会うことです。今日から受難節が始まり、この一週間、私たちはキリストが十字架に歩まれた道を覚えませんが、なぜ罪のない神の御子イエスが十字架に架からなければならなかったのかを、私たちは忘れてはなりません。私たちの人生は一度しかありません。そしてキリストの十字架も一度限りです。しかし、この二つが結びつきます。私という人間の人生を、今、キリストの十字架を結び合わせるのです。キリストの十字架は、死をもって終わりではありません。キリストは三日目に復活を遂げられました。そうすれば、私たちの今後の人生は、キリストの勝利に満たされ、歩み始めることができます。これが上から、神によって生まれ変わると言うことです。洗礼を授かり水の洗いを受けることにより、神の霊によって生まれ変わります。つまり私たちが肉にあって生まれた体は、キリストの十字架によって死にました。そして新たに与えられた体は、神の霊によって与えられたものであり、神の霊によって神の国、永遠の生命が与えられます。

## 結語

ヨハネ一九章には、主イエスが十字架に架けられて死を遂げられることが記されています。この時ニコデモは、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持ってきます（一九章三九節）。この時、弟子たちは恐れあまり逃げ出していました。しかしニコデモは、人目をはばかることなく、主イエスを葬るための準備を行い、大金をう使います。彼はこの時、すでに周囲のファリサイ人やユダヤ人を気にすることなく、キリストを受け入れ、神の霊

によって生きていました。この行為こそ、新生した彼の信仰告白です。

## 「信じる者は救われる」

ヨハネによる福音書三章一〜一五節

二〇〇九年四月一二日

## 序

今日、私たちはイースターをお祝いするために、主の御前に集められています。しかし、神を信じることができな人たちがからすれば、「キリストが復活されたことを、未だに信じているの？」と思われることでしょう。

## I 神の霊

ファリサイ派に属するニコデモは、主イエスに教えを求めるために、夜中、主イエスの所に来ました。しかしニコデモは、主イエスの「人は、新たに生まれなければ、神の国を見る事ができない」（三節）との言葉に躓きます。彼は神の国、つまり救いを求めながらも、自分の力で救いを獲得する道を探っていたからです。

そこで主イエスは、風を用いて説明されます。「風は思いのままに吹く」（八節）。今でこそ、気象学の発展により、風向きや風速を予測することもでき、理論的に風を説明することが出来ます。しかし、私たちが普通に外を歩いている時に、この風はどこからどのようなメカニズムで発生した風であるとは分析しません。春の気持ちいい風だ。冬ならば、冷たいきつい伊吹卸だ、と思うのです。つまり、私たちは四季折々に季節を楽しむのと同じ時に、風が存在し、私たちの生活と共にあることを実感しています。御霊の働きも同じです。風を手でさわったりすることができないように、神の霊も見たりさわったりできませぬ。しかし風が存在するように、神の霊も存在し、私たちに救いをもたらすために働いておられます。このことはギリシャ語で聖書を読めばはっきりします。ギリシャ語で、

「風」と「霊」は同じ言葉です。目には見えないけれども、確実に存在します。

そして主イエスは霊によって人が新しく生まれることができる、と語られます。それが神の救いに生きることです。風がどこから吹いてどこへ去って行くか分からないように、霊もどこから来るか分かりません。しかし、事実として神の霊は我々に臨んでいます。そして、私たちの心を入れ替え、新たににして、自らの行いに生きることから、主の恵みに生かされる者へと変えてくださいます。

ニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」（九節）と語ります。これは、「人間世界において理解できない事柄は起こりえないのだ」との思い込みです。私たちが今、主を礼拝する場集っていることは、家族や知人の誘いとといった外的な働きかけもあるでしょうが、それと同時に、聖霊の働きがここに存在することの証しです。

## II 希望に生きる

主イエスは語られます（三章一〇〜一三節）。これは、私たちが信じている、あるいはこれから信じようとしている神がどのようなお方であり、私たちに何をお与えくださるお方であるかを理解することにより、理解することができるとです。何よりも私たちは神を信じているのであり、私たちの知識を超えて働く力を持つておられることを受け入れなければなりません。つまり、私たちの知的理解を超えて働くことはあり得ないのであり、そうした奇跡的な事柄は信じるに値しないものとする考えを退けなければなりません。

ニコデモは、主イエスのメシア性を信じて、主イエスの所に来たのですが、しかしなかも、自分の知識を超えてお働きになる主の御業を受け入れることはできませんでした。私たちが救いに導く主なる神を、私たちの頭の中に閉じ込めておいてはいけません。主なる神を、私たちの知的理解において受け入れる範囲で、信じるのではなくありません。私たちの知的理解を超えてお働きになる神を、私たちは受け入れなければなりません。

そして、私たちの知的理解を超えてお働きになる神が、私たちを支配し、そして私たちが死から救い出し、永遠の生命へと導いてくださるうとしています。私たちは、このよう

にして主から差し出された救いの恵みを受け入れればよいのです。

今日は、イースターです。十字架の死を遂げられ、墓に葬られた者が復活されたことは、私たちの知的理解を遙かに超えた出来事です。人間的には受け入れることができません。しかし私たちは、天から降ってこられた神の御子によって、成し遂げられた出来事だからこそ、私たちは信仰により、信じることができます。そして、キリストの復活を信じることでできるならば、キリストによって成し遂げられる神を信じる者すべての復活も信じるることができます。知的に考えていては理解できません。私たちの知性を超えて働かれる主なる神が復活を遂げてくださったのであり、その主なる神が、私たちが愛し、私たちが救ってくださるために、私たちにも復活を与えくださいます。それは、キリストが再臨される時まで待たなければなりません。しかし、イエス・キリストが真の主・真の神だからこそ、主を信じる私たちにも復活が与えられ、主の祝福に満ちた永遠の命が与えられる希望に生きることができます。

## 「永遠の命を得る」

ヨハネによる福音書三章一六〜二一節

二〇〇九年四月一九日

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ三章一六節）。これは福音の神髄とも呼ぶべき、中心的な御言葉です。

## I 主の御言葉に聞け！

ニコデモは、主イエスが「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（三節）と語られた言葉に躓き、「どうしてそんなことがありえましょうか」と問い



直します。ニコデモは、神を求め、神による救いを求めながらも、なおも自然を超えて働く御力を信じる事ができませんでした。しかし主イエスは、自然を超えて働くことのおおきになる神がおられ、信じる者に救いを与えることを語っておられます。

## II 独り子

さて、主イエスは御自身のことを「人の子」（一四節）と語っていたのを「独り子」（一六節）と語り直します。つまり最初は、イエス御自身が十字架に架かられ、復活と昇天があることを預言されていましたが、今度は父なる神がどうであるのかを語られます。主は一〇〇歳になるアブラハムに、約束の代継としてイサクを与えられます（創世記二二章）。しかし主は、アブラハムに与えた独り子を、生け贄に献げるよう求めます。まさしくアブラハムの信仰が試される衝撃的な出来事で、心の中で葛藤があつたことでしょう。しかしアブラハムは主に従い、イサクを献げようとします。この時、主はアブラハムの信仰を顧みてくださり、代わりに焼き尽くす献げ物を用意してくださいました。つまり、アブラハムにとっては約束の子を神に献げ、子に対する愛と執着よりも、神に対する信仰と愛と希望を最も真剣に表明したのです（参照・創世記二二章一六〜一八節、ヘブライ一章一七〜一九節）。

神にとつても独り子を差し出すことには葛藤があります。しかし、独り子をこの世に遣わすことにより、神は私たちに対する愛と真実と義をもって、私たちを救うことを表明してくださいました。主が独り子をお与えになったことは、独り子と共に一切の祝福とすべての恵みを、神を信じる私たちにお与えくださったことを意味します。

### III 「裁き主」か「救い主」か

一方、神の裁きも考えなければなりません。キリスト教のことを批判される人びとの中には、「キリスト教の神は最後の審判で、人びとを裁く厳しい神である」と思っておられる方がいます。確かに主なる神は人を裁く権能を持つておられ、人類の罪を裁かれるお方です。人を裁くことの責任がどれだけ重たいものであるかを、私たちは裁判員制度が始ま

ることに於いて実感しています。

しかし神の裁きは異なります。最初の罪によつて、すべての者に罪が入り、さらに私たちは日々、神の御前に罪を犯し続けています。神の律法に従つて裁かれる時、私たちの行い・言葉・心の中のいづれもが死に値します。つまり私たちは本来誰一人、滅びから逃れることができない存在です。

誰ひとり救われることのない状態にある中、主を信じる者をすべて、主は救ってくださいます。そのために、独り子イエス・キリストをこの世に遣わしてくださいました。これは驚くべきことです。これが神の愛です。ですから、主なる神は、人間を滅ぼすことが目的ではなく、滅びにいたる者たちを救うために御子をこの世にお渡しくださいました。そしてキリストは、遜りの誕生と十字架に至る従順により、本来裁かれるべき、私たちに代わつて、罪の贖いを成し遂げてくださいました。

このことは八章の姦淫の女の記事で確認できます。彼女は姦淫の罪を犯しました。現行犯であり、言い逃れはできません。しかし律法学者やフアリサイ人は、彼女を裁くことはできず、年長者から順にそこから出て行きます。彼らは主の御前に自らが罪人であることを否定できなかったからです。そして主イエスは彼女に語られます。「わたしもあなたを罪に定めない」（八章一一節）。彼女は裁かれないことにより、命が与えられました。この出来事は、「独り子を救い主として信じる者が滅びないと主が定められたことと、重ねて考えることができます。主は、私たち罪人を罪の故に裁くことができになりませんが、そうせず、主を信じる私たちを救うために、独り子を十字架にお渡しくださいました。「御子を信じる者は、一人も滅びないで永遠の命を得」ます。「一人も滅びない」は、「独り子を信じる者」にかかります。つまり聖霊の働きにより、主イエス・キリストの十字架により救いが与えられたことを信じる者すべてに、救いが与えられます。一方、イエス・キリストを信じる事ができない者は、本来あるべき滅びの道から逃れることはできません（三章一八〜二〇節）。つまり、信じる者は皆、キリストの十字架の救いに与りますが、

信じない者まで含めて、誰でも救われますよとは、聖書は語りません。

しかし、主を信じる者は、裁かれることなく、二〇〇〇年前に成し遂げられたキリストの十字架の贖いにより救われ、永遠の命を得ることができません。救い主である主は、聖霊をとおして私たちと共にいてくださいます。だからこそ、私たちはニコデモが躓いたように自然を超えて働く主なる神を否定する者ではなく、生きて働く主なる神を受け入れ、信じ、私たちが自身がこの主なる神の御前に立たなければなりません。

## 「イエスの所へ行け」 ヨハネによる福音書三章一六〜二一節

二〇〇九年四月二六日

### I ヨハネの時代からイエスの時代へ

過越祭が終わり、主イエスは弟子たちと共にエルサレムからユダヤ地方に行かれます。主イエスが福音を語り、奇跡を行い、弟子たちが洗礼を受けていました（四章二節）。この洗礼は、復活のキリストが定められた洗礼（マタイ二八章一九節）とは多少趣が異なり、むしろ洗礼者ヨハネが授けていた洗礼、つまり悔い改めを求め、来るべき祝福を保証するものです。

ここで問題なのは、これと並行して洗礼者ヨハネも洗礼を授けていたことです。一章三〇〜三一節を見る限りヨハネの働きは既に終わっています。またマルコ一章一四節では、ヨハネが捕らえられた後に、主イエスが宣教を始めていることを語ります。洗礼者ヨハネは過去の人物であり、主イエスが宣教を行い始めた時に、なおも人びとに洗礼を授けていたのはおかしいではないかとの疑問を持たれます。しかし私たちは、現代的に聖書が事実通り記されているか否か、白か黒かを判断する読み方をしてはいけません。もちろん、主イエスの足取りをより正確に理解することは求められません。しかし、主イエスがヨハネの

逮捕の前に宣教活動を始められたか、否かを決定する必要はありません。むしろ私たちが今与えられた御言葉から読み解くべきことは、主イエス・キリストこそが、真の救い主であり、洗礼者ヨハネは、主イエスに洗礼を授けることにより、その働きを終えたことを確認することです。

### II 洗礼者ヨハネと弟子たち

洗礼者ヨハネは、主イエスに洗礼を授けることにより、自らの役割が終わったことを知っていました。そのため自らの弟子たちを主イエスの所に遣わしました（一章三六節）。しかし、なおもヨハネに従ってきた弟子たちがおり、またさらに新たな人たちがヨハネに洗礼を授けてもらうために近づいて来ていました。そうした時、あるユダヤ人がヨハネの弟子の所に来て、「イエスの方に多くの人びとが行っている」と語ります。なおもヨハネに従ってきた弟子たちにとっては、気分を損なうことです。そのため彼の弟子たちは、ヨハネにその事実を語ります（二六節）。彼の弟子たちの内心は、ヨハネに何とかして欲しい思いがあります。自分たちの先生を大事に思う心、嫉妬や対抗心が入り交じっています。自分たちが熱心にやっていることに対する自己目的化の意味もあつたかも知れません。

ヨハネ自身、自らの役割は終わったと信じている反面、イエスの言動が、誰から見てもメシアであるとの栄光に満ちた姿に見えず、自らの確信の内にも迷いがあつたのでしよう。宣教を続けている所に、彼自身の弱さがあります。ヨハネは、最後の預言者とも呼ばれ、主イエスの道備えをする特別な働きが主から託された者ですが、彼は一人の罪人であつたことを、私たちは忘れてはなりません。彼を神の位置においてはなりません。

### III 天から与えられた人、イエス・キリスト

その上でヨハネは、自らの信仰の弱さを覚えつつ弟子たちに言い聞かせます（二七〜二八節）。ここでヨハネが、「天から与えられなければ」と語った言葉は、重要な証言です。つまり、ヨハネの弟子たちは、あくまでヨハネに目が行き、それを広めるために必死です。

ニコデモは人間的な熱心で神の国、救いを勝ち取るうとして、主イエスの所にも救いを得るために来ていました。しかし主イエスは「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（三章三節）と語られ、霊的に天から救いが与えられなければならないことに、ニコデモは失望しました。

ヨハネは、弟子たちに対して、人間的な熱心で伝道をするのではなく、救いとは天から与えられることを語ります。そして、自分は天から召されてその努めについているけれども、あくまでも地上に生きる一人の罪人であり、メシアではないことを語ります。天から遣わされた方は、主イエス・キリストおひとりです。そのため、ヨハネは自分に留まるのではなく、天から与えられた方である主イエス・キリストのもとへ行けと語ります。

#### IV 花婿の前に立つ花嫁

そしてヨハネは最後に、自分は花婿ではなく、花婿に介添えしている友人であると語ります。花嫁である神の民が、花婿であるイエス・キリストの前に導かれる時、ヨハネはこの上ない喜びに満たされるのであり、それこそが、ヨハネの与えられた働きです。

今、この御言葉に招かれている私たちは、神の御前に集められたキリストの花嫁です。だからこそ、私たちが花婿の前へと導くヨハネや牧師を、主と崇めたりしてはなりません。私たちは、私たちが罪から救い出し、神の国に導いてくださる花婿であるキリストを見なければなりません。それと同時に、キリストの花嫁に相応しい純潔を身に着けることが求められます。自らの力で花婿に近づくことはできませんが、純潔、謙虚さ、遜りにより、主の御前に頭を垂れるべきです。今、キリストの花嫁の純潔を奪おうとする試みは今一段と激しくなっています。だからこそ私たちは、花婿であるキリストを見失わないこと、それと同時に、花嫁とされている私たち自身が、キリストの花嫁に相応しい者として、準備を整えていかなければなりません。

#### 「神から遣わされた方」

ヨハネによる福音書三章三一〜三六節

二〇〇九年五月三日

#### 序

三章になり、主イエスとニコデモの会話、そして主イエスと洗礼者ヨハネに関して語られてきました。しかし今日のテキストは、誰が語っている言葉か？ 新共同訳聖書では、三〇節でヨハネの言葉を終え、聖書記者であるアルパヨの子ヨハネの言葉とします。また主イエスの言葉と取ることのできるでしょう。いずれにしても、主イエスが語った言葉を、聖書記者がまとめ、この箇所に対応しい言葉として、書き記したかと思えます。しかし同時に、文章の流れを汲みつつ、御言葉から聞かなければなりません。

#### I 主なる神と私たち

聖書記者は、「上から来られる方は、すべてのものの上におられる」（三一節）と語ります。「上」は「天」と言い換えもできるでしょう。天に対する地であり、「天から来られる方」とは、主イエス・キリストだけです。他に、天から来られた方はなく、洗礼者ヨハネを含めすべての人間は「地から出る者」です。つまり、ヨハネは自らを神に属するものであることを否定し、暗にヨハネの弟子たちが、ヨハネの指し示す主イエスの所に行くことなく、ヨハネの所に留まることに対して非難します。御父・御子・御霊なる三位一体の主なる神と、地に属する私たち人間、ここに徹底的な違いがあることを私たちは忘れてはなりません。

私たちが主なる神を信じる時、神を私たちの頭の中に閉じ込めてはなりません。神を私たちの奴隷にしてはなりません。神は、天に在され、神の莊嚴であり崇高に満ち、威嚴に満ちた天に属するお方です。そして神は、天地万物を創造し、私たちに生命を与え、今もこの時、命を与え、私たちに神の御前に生きる喜びを与えてくださいます。私たちが主権的に生きているのではなく、主なる神の主権の下、私たちは主によって生かされています。ウエストミンスター小教理問答問四は次のように語ります。

問四 神とはどのようなお方ですか。

答 神とは、その存在・知恵・力・聖性・義・慈しみ・まことにおいて、無限・永遠・不変の霊です。

特に「無限・永遠・不変の霊です」と語る時、私たち人間と比べなければなりません。空間的に神が無限のお方であるのに対して、私たちは場所的です。時間的に神が永遠のお方であるのに対して、私たちは時間的です。そして変化において、神は変わることはないお方であるのに対して、私たちは時間により変化し、肉体の死にまで至りません。だからこそ、天から来られた主イエスは奇跡を行い、病人を癒し、死人を甦らせること、私たちの常識を越え、自然を超えて働くことが出来ること、私たちは受け入れなければなりません。私たちの思いを超えて働くことができる方こそ、主なる神です。

このように天におられる神と地にある人間との違いを確認することは、主なる神に代わる神々(偶像)を否定し、人が神の位置に近づいたり、神に代わる存在となることも、否定します。

## II 神を知るために…神の啓示

では、救い主である主なる神によって私たちが救われるためには、どのようにすればよいのでしょうか？ 私たちは神を捜し求め、たどり着くことなどできません。そのため、私たちが神の救いに与り、神を知ろうとする時、私たちは神が御自身をお示しくださる言葉に聞くこと以外に方法はありません。神は聖書によって御自身を私たちに啓示してくださっています。

第一に神が直接語りかけてくださる直接啓示です。旧約の族長アブラハムやモーセに対して、主は御自身でもしくは使いをおしてお語りくださいました。第二に、主は預言者に語られ、その預言者の口を通して預言をお語りくださいました。第三に、自然を超えて働く奇跡として御自身を示されます。出エジプトにおける数々の奇跡などが挙げられます。そしてここで語れているように、天から来られた方、イエス・キリストによって語られた

言葉は、まさに神の言葉そのものです。最後に、主の聖霊によってまとめられた聖書です。しかし、私たちが今、神の救いを求め、神を知ろうとすれば、神がお与えくださった啓示の書である旧・新約聖書に聞くしかありません。だからこそ私たちは救いを求めるために、聖書を読み続け、また主によって招かれた礼拝に与り続けるのです。

そして、神がお遣わしになった方、つまり主イエス・キリストのみが、神の言葉をお話されます。主イエス・キリストの御言葉に耳を傾ける以外に、私たちが神を知り、神の国、つまり天国における祝福を見上げることも、そこに入ることもできません。

## III 御子に託された私たちの救い

そればかりか、天から御子イエス・キリストを遣わされた御父は、御子を愛しておられ、御子に、地における人の救いをすべてゆだねられました。私たちは、天国について、神の救いに関して、御子の御言葉に聞かなければならないばかりか、御子にならなければ、つまり、御子のよって成し遂げられた十字架の御業によらなければ、私たちは自ら持っている罪によって裁かれ、神の救いに入れられることはありません。だからこそ、御子の語られる御言葉に耳を傾け、御子によってなされた十字架と復活の御業を受け入れることが求められています。これが、天に座する主なる神が、地に属する私たちにお与えくださる祝福です。

地上における富・名声・権力を追い求める時、私たちに天における祝福は一切与えられません。私たちが、真に生きる喜びと祝福、神による救いと永遠の生命を求めるならば、地上の一切のしがらみから離れ、主がお語りくださる御言葉に集中し、御子イエス・キリストによつて与えられる十字架と復活の御業を受け入れ信じていくことができます。この時、私たちは、真の喜びと希望に満たされ、また地上における生活においても、必要なものはすべて主がお与えくださることを信じ、主の御言葉に聞きつつ、祈りをもって地における日々の生活もまっとうしていくことができます。

## 序

私たちは、喉が渴いたら水を飲むことは当然のことです。しかしこうしたことは、非常に恵まれた状態です。ローマ帝国が繁栄したことの理由の一つも、水道制度の完備が挙げられます。しかしパレスチナ地方では、水は非常に重要なものでした。水を得るために深い井戸を掘らなければなりません。それも水量が十分ではなく、朝・夕に女たちが集まり、井戸のふたを開け、必要な量の水のみを汲んでいました。そのため、それ以外の時間に人々が水を汲むことはなく、ましてや他人が水を汲むことなどできませんでした。

## I サマリアを通る主イエス

主イエスは弟子たちと共にユダヤを去り、ガリラヤに行かれます。通常ユダヤ人がガリラヤへ行く時、サマリアを避けて、ヨルダン川東方を通ります。ユダヤ人は、サマリア人がユダヤ人から離れた異教徒と思ひ、忌み嫌っていたからです。

しかし、主イエスはサマリアを通られます(四節)。何か急ぐ用事があったのででしょうか？ いや主イエスはあえてサマリアを通られたのです。ここには主の御意志が表れています。主はサマリア人をおして、主の御業が示されるために、主イエスをサマリアへと行かせたのです。

主イエスの宣教の目的は、捨てられた羊を連れ戻すことであり、捨てられた民であるサマリア人を回復することです。主イエスによって始められたサマリア人の回復は、使徒八章において、迫害によってエルサレムを散らされていった使徒たちによって成し遂げられていきます。そして今、日本においてもその活動が続けられています。

## II キリストとの出会い

主イエスの弟子たちがこぞって食べ物を買うために町に行き、主イエスはおひとり、旅に疲れ、井戸のそばに休んでおられます(八節)。旅の疲れを覚え、喉が飢え渴き、井戸のそばにいながらにして水を飲むことができせん。主イエスの孤独さと切なさが、ここにあります。こうした状況は、十字架の上の主イエスと重ね合わせるができます。主イエスは十字架の死の時、「渴く・成し遂げられた」と語り、息を引き取られました(ヨハネ一九章二八・三〇節)。キリストは孤独な中、十字架で死を遂げられました。

一方ここで登場するサマリア・シルカの女は一人で水を汲みに来ます。人々とは違う時間帯にここに来ていました。つまり、町の女たちの交わりには入ることができなかったからです。それは彼女の異常な生活の故です(一六節以降)。人々から嫌われ、軽蔑され、彼女自身も人と交際することを疎ましく感じていたからです。ここに彼女の孤独が示されています。

つまり、孤独を覚えておられたキリストが、孤独な生活を送っていたサマリアの女と出会いました。私たちがキリストと出会うとは、まさしくこのように一対一でなければなりません。私たちの教会では、家族で教会に来られる方が多く、また聖徒の交わりもあります。今日も私たちは聖餐の礼典に与り、大垣教会の一員・神の国の一員であることを覚えます。しかしその前に私たちは一人の人間として、キリストの御前に立たなければなりません。キリストとの交わりがあつてこそその聖徒の交わりであり、貧しい者を助けるディアコニアも生じます。大切なことは、教会員を見て何かを考えるのではなく、キリストを見て行動することです。一人ひとりが直接キリストの御前に立たなければなりません。

来週の御言葉になります。主イエスは彼女のすべてを見透かしておられます。彼女のすべてのことをご存じのキリストが、彼女の罪を赦し、彼女を生かしてくださいます。そしてあなたのすべてをご存じであるキリストが、あなたを生かしてくださいます。キリストが、あなたの唯一の救い主、あなたの唯一の贖い主です。

## III 命の水

主イエスはサマリアの女に「水を飲ませてください」と頼みます。しかし女にとつては、ユダヤ人が喉が渴いた所で、知ったことではありません。他者に無関心な現代人と同じです。しかし主イエスは、民族的な遮断・社会的な断絶にある人に対して、その壁を取っ払い、和解をもたらしてくださいます(ヨハネ一〇章一六節)。つまり、サマリアの女への語りかけは、失われたご自身の民への働きかけであり、一人の罪人の回復のためです。

主イエスは語られます(一〇節)。ここで話しが転換し、渴いていたのは、主イエスではなく、女であることを明らかにします。キリストは女の飢え渴きを知っておられたのです。これは生きた水に対する飢え渴きです。社会生活を送る中、様々な苦しみにあえぐ一人ひとりが持っている飢え渴きです。それをキリストは知っていてくださいます。

そしてこの時、女は目の前にしているユダヤ人が何者であるのか考えることとなります。私たちも私たちに示されたキリストが誰なのか真剣に考えなければなりません(一一―一二節)。キリストこそが、生きた水の源泉そのものです。そのため、主イエスは「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」(七章三七節)と語られます。つまりあなたがキリストにつながる時、すでにこの生きた水を受けています。そして、キリストによつて語られる御言葉により、私たちはさらに生きた水に満たされていきます。だからこそ私たちはキリストの前に立たなければなりません。日々、御言葉の養いを受け、飢え渴きを満たさなければなりません。キリストを除いて、生きた水をお与えくださる方はいません。そして、キリストの前に立たないのに、飢え渴きを嘆いても、それが満たされることはありません。

私たちは、この後、主の晩餐の礼典に与ります。キリストの十字架により、あなたの罪が贖われ、あなたの救いが完成しました。そのためにキリストは十字架で苦しまれ、死を遂げてくださいました。そのことをパンとワインで確認していただきたいと思えます。

そしてキリストの赦しが表示される聖餐に与ることにより、同じようにキリストによる救いが与えられた兄弟姉妹の交わりが生じてきます。私たちの信仰は、キリストとのつなが

りである縦の関係がしっかりとしていなければ、聖徒の交わり・ディアコニアという横の関係も、いつまでたつてもしっかりとしたものにはなりません。

## 「すべてをご存じである主」

ヨハネによる福音書四章一六―一八節

二〇〇九年五月一七日

### 序

主イエスは、サマリアのシカルに立ち寄り、喉の渴きを癒すために女に水を求めます。しかし同時に、主イエスは、命に渴いているのは、あなたであること指摘になります。そして女に命の渴きを癒すためにキリストと出会うこと、キリストの御前に立つことを求められます。そして、私たちもまた、キリストの御前に立つことが求められています。

### I 女を救うために近づかれる主

女は人目を避けて一人水を汲みに来ていました。かつ、自分の前で水を求めていたのはユダヤ人です。自分には関係ないと思っていました。しかし、主御自身が彼女に感心を持つてくださった、彼女の前に立つてくださいました。そして御自身に感心を寄せます。主が求められたのは、ユダヤ人から捨てられた民であるサマリア人の中にあつて、さらに人々から遮断された彼女を救うことでした。そのために、主は御自身が何者であるかを、彼女に対する鋭い問いかけによつて語られます(一六節)。

彼女にとつて家族のことは一番隠しておきたかったです。内縁関係にあり、人々から非難されていたことでしょう。ユダヤ人社会であれば、石打ちの刑に処せられるべき行為です。彼女自身、罪意識があり、人々の交わりに入ることができませんでした。そのため、女は主イエスの問いかけに動揺したことでしよう。

### II 女の罪をあばきたがる人々

しかし主イエスはさらに、彼女の隠しておきたかつた事実を明らかにされます（一八節）。こうした事が明らかになれば、人々はゴシップを追いかけます。現代であればワイドショーの格好のネタです。現在の同居人とは内縁関係にあり、過去の五人とは結婚をしていました。五人とは死別したのかも知れませんが、五人続けてではなかつたはずであり、離婚も繰り返したことでしよう。彼女の奔放さが原因であつたと言わなければなりません。この五人の夫とは、罪人を指し示す五種族の異邦人の比喩として語られているということも長年言われてきています（参照・列王記下一七章二四節）。

どのような解釈しても構わないのですが、私たちが注目しなければならないのは、彼女が何者であるかを言い当てた主に目を向けることです。

### III 全知全能の主

彼女にとつては驚くべき言葉が主イエスから返つてきました。彼女の過去と現在の生活、その表も裏もすべてさらけ出されたからです。

彼女の前に立つておられる主イエス・キリストは、彼女のすべてをご存じです。主なる神は全知全能です。だからこそ、私たちはいつも主の御前にあり、私たちは主の御前に何一つ隠すことはできません。私たちにとつて、他人に隠したい行い・言葉・心の中も、主はすべてご存じです。私たちはこのことを、肝に銘じなければなりません。

それと同時に、主は、彼女が一番隠しておきたい罪の部分を明らかにされます。もちろん、主が彼女のすべての罪を明らかにされるのは、人々に見せびらかせるためではありません。主が女に会われたのは一対一です。先週の御言葉において、まさに私たちは主イエス・キリストの御前に一人で立たなければならぬことを語りましたが、この時、主は私たちの隠しておきたい過去の罪や、人を傷つけてきた弱さを明らかにされます。

### IV 主の御前に立つ時

罪の刑罰は死であり、一人では決して生きること苦しみからも逃れることができないことが示されるためです。つまり、私たちがいくら主イエス・キリストの御前に立つたと

しても、今までの自分の生き方を正当化し、自らの富・権力・功績を誇っている状態では、救い主を受け入れることはできません。だからこそ、私たちは主イエス・キリストの御前に立つた時、自らのありのままの姿を主に明らかにしなければなりません。そこに悔い改めがなければ、真の救いを求める心は生じてきません。

しかし、主が主の御前に私たちの罪を明らかにするのは、裁くためではありません。主イエスは「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。私があたえる水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（一四節）とお語りくださいました。つまり主が私たちの前にお立ちくださるのは、裁くためではなく、罪を悔い改めた者の罪を赦し、生かすためです。本当ならば、私たち自身が自らの罪の償いを行わなければ、永遠の命を得ることなどできません。しかし命に渴いた私たちに代わって、私たちの罪をキリストが担ってくださいました。それが十字架です。だからこそ、私たちが命に渴いていたにも関わらず、それを担ったキリストが、十字架上で死を遂げられる時、「渴いた」と語られたのです。そして私たち自身は、キリストにある命の泉により渴きを満たし、生きる命が与えられています。これが神の愛、キリストの愛です。

だからこそ、私たちは罪が暴かれることに恐れつつキリストの御前に立つ必要はありません。私たちがキリストの御前に立つ時、隠されていたすべての罪が指摘されますが、同時に「この罪はキリストの十字架によって贖われ、あなたの罪は赦された」と宣言してください。そして義と認められ、神の子としてのすべての特権が与えられます。

だからこそ、私たちはキリストの御前に一人で立つことが求められています。生きて働いておられる主なる神がここにおられ、そして私たちのすべてをご存じです。私たちは、主の御前に恐怖ではなく、畏れ敬いつつ立つことが求められています。この時、私たちはキリストから永遠の命に至る水が与えられ、真の喜びが与えられます。

## I 主イエスとサマリアの女

主イエスは、サマリアのシカルという町に立ち寄り、そして、女に水を求められました。しかしそれは主イエスが女を救いへと招き入れてくださるためでした。主イエスは、女を受け入れた上で、女の隠しておきたかった過去を明らかにされ、悔い改めを求めます。神による救いを求めるためには、周囲の人々を気にすることなく一対一で主の御前に立ち、自らを省みる必要が求められます。そして自らが救いに相応しくない者であることが示される、自己否定と罪の悔い改めが生じ、真の信仰が与えられていきます。

すると女は、初対面でありながらも自分のすべてを知っておられる主イエスを、単なるユダヤ人ではなく、真の神から遣わされた預言者として受け入れました。

## II 礼拝の場所

そして女は、「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています」（二〇節）と語ります。これは女が目の前にいるユダヤ人預言者によって、真の救い主メシアについて知りたいとの思いから出てきた言葉です。

女の語る「この山」とはゲリジム山のことです。サマリア人がユダヤ人から嫌われていたのは、南北に分かれた時、北イスラエルが罪を繰り返して、神から離れていったことが原因にあります。ユダヤ人たちがエルサレムにおいて神礼拝を守っていたにも関わらず、サマリア人は、ゲルジム山において礼拝を守っていたことも原因の一つにあります。

しかし、エルサレムが築かれ、礼拝の場とされていくのは、ユダヤが南北に分かれた後のダビデの時代です。一方、アブラハムが約束の地に導かれ、最初に聖所を作り礼拝を守ったのがシケムであり、それがここで語られているシカルです。またモーセも出エジプト

を果たしたイスラエルが、ヨルダン川を渡って約束の地カナンに入る前に、ゲルジム山に祝福があることを語っております（申命記一章二九節）。つまり、神礼拝が行われていた場所は、スカルやゲルジム山の方が歴史は古く、ユダヤ人とサマリア人が別れた後にユダヤ人たちはエルサレムで神礼拝を献げるようになったのです。

そうした背景の中、女は、目の前にいるイエスを受け入れるにあたっては、ユダヤ人のようにエルサレムで礼拝を守らなければならないのか？と問うています。

## III 誰を礼拝するのか

主イエスは「婦人よ、わたしを信じなさい」（二一節）と語られます。主イエスは御自身メシアであり、真理を啓示することを語っておられます。これは重要な言葉であり、ここで歴史の大転換、旧約から新約へと時代が変換がなされます。

「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らない者を礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人からくるからだ」（二一・二二節）。ここで二つの事柄、つまり礼拝の場所的な問題、さらに礼拝の対象が誰であるのかという問題の答えが示されています。

まず礼拝の対象に関して。旧約であれば、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」であり、メシアでした。しかし主イエスは、「父を礼拝する時が来る」と語り、「主なる神」Ⅱ「父」であると告白されます。主イエスの時代、神の超越性が強調され、「あなたはその御名をみだりに唱えてはならない」との第三戒が幅をきかせており、民衆と神との距離が非常に開いていました。しかし主イエスは、神を父とお語りになり、御父と御子の親しさ、近さを語ります。つまり私たちが礼拝すべきお方は、御子イエスの父なる神であることをはっきりとお語りになったのです。そして、この主イエス・キリストをつかわされた父なる神を、私たちは礼拝します。しかも父なる神に対して、私たちは「アツバ、父よ」と親しく呼びかけることが良しとされています。主なる神は、自らの罪を悔い改めない者に対しては裁きを行う厳格なお方ですが、一方、主の御前に立ち、自らの罪を悔い



改める者は、やさしく招き入れてくださり、救いの祝福に満たしてください。

主イエスは、礼拝の対象が、キリストの御父であるとはっきりとされた上で、「あなたがたは知らない者を礼拝している」と語られます(二二節・参照・使徒一七章二二〜三二節)。つまり、名前も知らずに信じるのではなく、知った上で信じて礼拝しなさいと語っておられます。

#### IV イエス・キリストを礼拝する

そして主イエスは「救いはユダヤ人から来るからだ」と語ります。主イエスは、サマリア人に対するユダヤ人の優越性を語っているわけではありません。むしろ、主イエスは福音書全体でユダヤ人たちの罪を指摘し、さらにサマリア人の譬え(ヘルカ一〇章二五〜三七節)では、サマリア人の信仰を賞賛します。つまり主イエスがここで語られていることは、ユダヤ人の素晴らしさを語っているのではなく、アブラハムの子、ダビデの子、ユダ族として約束のメシア、キリストがお生まれになったことを語っておられます。

ですから、神を礼拝することは、「どこで」礼拝するかが大切なのではなく、むしろ誰を礼拝するかが大切です。つまりイエス・キリストの父なる神を礼拝することが大切であることを、主イエスはお語りになっています。ここに時代の大転換があります。

私たちは、今、大垣教会に集い、神を礼拝しています。しかし大垣教会で礼拝を守ることが大切なのではなく、大垣教会においてイエス・キリストの父なる神が御言葉によって指し示され、生きて働く主なる神を畏れつつ、礼拝することが大切です。このお方が、私たちを死の裁きから救い出し、神の子の特権をお与えくださり、神の国における祝福へとお導きくださいます。だからこそ私たちが主を礼拝する時には、まず私たち一人ひとりが主の御前に立ち、行いも言葉も心もすべてを知っておられる主なる神の御前で自らの罪を悔い改めつつ、なおも私たち一人ひとりを愛してください、永遠の生命をお与えくださる主に感謝しつつ、礼拝を献げ、賛美すべきです。

#### 「真の信仰を持った者」

ヨハネによる福音書四章二五〜三〇節

二〇〇九年六月一四日

#### I 弟子たちの態度

主イエスはサマリアの女と話しをしていました。女自身が「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」(九節)と語ることから、当時ユダヤ人がサマリア人と話しすることがなかったことが明らかになります。むしろ、出会うことを避け、同時に罪人として蔑んでいました。ですから、二人が会話していたことは驚きです。

そうした状況の中、主イエスの弟子たちは帰ってきます(二七節)。ユダヤ人たちにとってはお考えられない状況が目に入ります。普通ならば、「先生、なぜ、罪人であるサマリアの女と話しているのですか」と聞いたただすような問題です。しかし弟子たちは、先生である主イエスに何も尋ねることはせず、まったく意に介しませんでした。つまり弟子たちは、主イエスに対して、サマリアの女に対しても無関心でした。

そもそも弟子たちは、主イエスによってどのようにして召されたのでしょうか。アンデレは兄弟シモン・ペトロに出会い、「わたしたちはメシアー『油注がれた者』という意味―に出会った」と語ります(一章四一節)。またナタナエルは「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」と答えています(一章四九節)。その上で、カナの婚礼においては、水を上等なぶどう酒に変える奇跡を見ました。つまり弟子たちにとって、先生であるイエスが、神の子メシアであることはすでに示されていました。

しかし、弟子たちは無関心です。つまり弟子たちはイエスがメシアとして何かをされようとしていることに関心はなく興味も示しません。つまり弟子たちに取っての関心は、イエスが自分たちユダヤ人に何をもちたらしめてくださるのかということのみです。ここに弟子

たちが主の大いなる御業の豊かさに入れられることなく、自己中心的な狭い幸せを求めている姿が露わになります。

私たちに求められていることは、救い主イエス・キリストを礼拝し、キリストによってもたらされる救いと神の国の完成を追い求めることです。そうであるならば、主イエスがサマリアの女と出会われ、会話をしておられたのを目撃したならば、そのことをとおして、主イエスは何を目的にそのようなことをなされたのかに興味を示すことが、私たちに求められています。主が救いの完成に向けて行動されることは、私たちの救いにも関係するのとだからです。

## II サマリアの女に示されたメシア

一方、主イエスに出会ったサマリアの女は「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」（二五節）と語ります。これは「あなたこそがメシアですよ」と言った問いかけです。彼女はイエスが語る言葉により、この方こそ旧約聖書をおして語られてきたメシアであることを受け入れたのです。主イエス御自身も「それは、あなたと話しているこのわたしである」と、女の問いかけに対して答え、その結果、彼女はメシアと出会いました。

## III 救いの喜び

サマリアの女は、霊と真理をもってイエス・キリストの父である神を礼拝する者へとされました（二四節）。するとまず第一に、彼女はイエス・キリストがどのような方であるか知ろうとします。弟子たちのように無関心ではいられません。だからこそ、女はこの方が「キリストと呼ばれるメシア」かどうか確認します。

第二に、真の救い主に出会うことは、喜びに満たされ、聖霊によって押し出されるように人に証しせざるを得ないものとされました。それはメシアにある永遠の命に至る水を手に入れたからです。彼女は今日一日の必要を満たす水を汲みに井戸に來ていました。彼女

はそれを置いて喜びを伝えるに行きます（二六節）。しかも彼女は罪人として、人目を避けて暮らしていました。その彼女が、町に行き、人々に語り始めます。メシアによる救いが示される時、彼女から民族の違いや罪の有無などの障害はすべて取り除かれました。

第三に、聖餐の共同体に入れられました。私たちはこの後、聖餐式に与ります。聖餐式に与るとは、十字架において割かれたキリストの体を、このパンにおいて覚え、十字架において流されたキリストの血を、このぶどう酒において覚えるためです。同時にこの聖餐に与る私たちは、天国における聖餐に招かれています。時代を超え、民族を超え、言語の違いを超え、キリストにつながる民が、神の国、天国において一同集い、主を賛美し、礼拝することができます。その素晴らしさを覚えることができる時、私たちはキリストによる救いが与えられていることに感謝をもって受け入れることができます。

## 「神の御心を成し遂げる」

ヨハネによる福音書四章三一〜三八節

二〇〇九年六月二八日

## 序

主イエスは、サマリアの町で、女に永遠の命に至る水があることをお示しになられ、女はこの主イエスの言葉を信じて、町の人びとの所へと行き、主イエスを証しします。

## I 霊的な食べ物

この時、弟子たちは食事の買い物から帰ってきて（八、二七節）、食事の準備をします。主イエスが福音宣教を行うために、弟子たちは裏方にまわり、執事的な奉仕を行っていました。こうした行為は教会において必要であり、教会において整えられていくべきです。ですから、主イエスも弟子たちの行動を否定されることはありません。しかし主イエスは、弟子たちが準備した食事に満足した上で、「これとは別に、あなたがたの知らない食

べ物がある」と語られます。主イエスが弟子たちに求めておられることは、奉仕を行う事ではありません。主イエスはサマリアの女と話し合い、自ら喉の憂いを満たしつつ、同時に彼女に対して永遠の命に至る水を示されました。私たちは「あれか、これか」で物事を判断してしまいがちですが、そうではありません。実際にある水や食べ物と、主イエスがお与えくださるうとしていられる永遠の命に至る水や食べ物をごっちゃにしてはなりません。主イエスが弟子たちに語っておられることは、永遠の生命に至る霊的な食べ物のことです。しかし弟子たちは、主イエスの語る言葉の真意を受け止めることができませぬ。

## II 伝道

主イエスは続けて語ります。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」(三四節)。主イエスが語られたこの言葉は、非常に奇妙です。主イエスの具体的な働き、福音宣教とは何かについて語ります。

主イエス御自身が、命に至る食べ物そのものです。「わたしをお遣わしになった方」とは、「父なる神」であり、「その業を成し遂げる」とは、まさにサマリアの女のように、神の救いの外にあった民を捉え、命に至る食べ物を食べさせること、神による救いに与るものとする事です。主イエス御自身、この父なる神の御心を知り、父なる神を愛するよ

うに、まだ救いの外にいたサマリアの女を愛し、救いへとお導きくださいました。

一方、サマリアの女はどうであったのでしょうか。主イエスによって永遠の命に至る水を得て、人びとに伝道するために、町に出かけて行きました。喜びに満たされ、今まで自分自身が罪人であり、人びとから隠れて生活していた者であったことを忘れたかのような働きです。伝道とは、こうした姿勢が求められることも否定してはなりません。

しかし主イエスは、弟子たちにも、同じように出て行って伝道しなさいと、種蒔きを行い、それが熟するのを待ちなさいと語っておられるではありません。伝道とは、それが目的ではないからです。伝道すること、そのために時間を割くことを行えば良いのではありません。今日は、チラシを何百枚配った、何軒訪問した。その結果が尊ばれることでは

ありません。むしろそれは手段であり、結果となつてはなりません。主イエスが求めておられることは、「その業を成し遂げる」ことです。滅びに至る魂に、永遠の生命に至る水、食べ物を与え、信仰に生きる者とする事です。

出エジプトの時、主はイスラエル人に毎日必要な食べ物として肉を与え、マナをお与えくださいました。イスラエル人はそれを受け取り、食べれば良かったのです。主が神の民に必要な食べ物すべて準備してくださいました。彼らは、それを拾えば良かったのです。受け取るだけです。伝道も同じです。伝道が目的化してはなりません。伝道とは、主が御言葉の種を蒔かれ、聖霊によって成長させられている民を、刈り取る仕事です。これが主の御心を行うことです。伝道を行い、永遠の命の水、永遠の命のパンに生きる一人の人が捉えられることが目的とならなければなりません。

## III 今、借り入れる！

弟子にとつて、サマリア人は罪人であり、ここで福音を伝える意義すら持ちませぬでした。また主イエスがサマリアで、何を行おうとされているのかすら無関心でした。しかし主イエスは、「色づいて借り入れを待っている」と語ります。つまり、サマリアにあつて、主イエスによって福音の種が蒔かれ、女は信仰を持ち、人びとにそれが伝えられ、多くのサマリア人が女を受け入れ、主イエスの所に来ようとしています(三九節以降)。

私たちは、異教の地にあつて、「種蒔きが必要だ」、「伝道だ」と叫びます。しかし私たちに求められていることは、主の御霊によって御言葉が示され、福音が示されている民に、永遠に生きる水・永遠に生きる食べ物を手に入れ、信仰に生きる者へと導く事です。そのために私たち自身が、永遠の命に至る水・食べ物、御言葉によって神の救いの確かさが示され、感謝と喜びに満たされる必要があります。私たち自身が、救いの喜びに満たされていなければ、奉仕の業も、伝道の業も実りをもたらすことはありません。

## 序

主イエスがサマリアを訪れ、女に「生きた水を与える」と語られたことから、異邦人であるサマリア人が神を信じることとなります。

## I 女の変化

女は、主イエスから生きた水を得た途端に、本来の目的であり今日生きるために必要であった水がめをその場に置いたまま、町に出て行きます(二八節)。それ程、彼女にとつて、主イエスと出会うということは衝撃の出来事でした。

彼女は、罪の故に人びとから隠れて、一人、真昼に水を汲みに来ていました。つまり、自らの罪を背負い、人びとから罪人とされ、人びととの交わりを避け、人びとから隠れるように生活していました。その女が「この女が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」(三九節 参照・二九節)と主を証しします。今までの彼女とは違い、恥じらいはありません。キリストを受け入れ神を信じる、永遠の命に至る水を得ることにより、人びとから隠れて暮らさなければならぬような恥らしさがある生活だった人間が、罪が赦された者として、晴れ晴れとして人びとの前に出ることができるようになりました。

つまり彼女にとつて命の水とは、罪の赦しそのものでした。彼女は自らの罪を受け入れ、悔い改めたのです。キリストによつてその罪は贖われているため、彼女は人びとの前に行き、証しすることができます。

## II 人びとの変化

ところでこの女の証言により、その町(サマリアのシカル)の多くの人々は、イエスを信じます。これこそ驚きであり、これが福音の力です。人々は、女の素性、つまり不品行な女であり、次から次へと別の男へと渡り歩いていくことを知っていました(一八節)。

だからこそ、彼女は今まで人びととの交わりの中に入ることができなかったのです。

しかし、彼女が自らの罪を示され、罪を主の御前に悔い改め、信仰によつて生きる者とされた時、彼女の口から発せられる福音に人々は耳を傾けました。つまり彼らが話しを聞いている女は、以前の女ではないことが、人々の目にも明らかになったのです。

私たちは、この大垣の地で一人が神の民とされることがどれだけ時間がかかるかを知っています。しかし私たちは、有名人を呼ぶような伝道集会は行いません。クリスチャンの有名人を呼べば、社会的に注目を集めるでしょう。多くの人たちに教会を知っていたことは必要です。しかしそこで福音が集めるでしよう。多くの人たちに教会を知っていたくしろ語る人が無名であっても、そこで語られる言葉により、神による救い、福音が語られ、人びとの心に留まる必要があります。名声は逆に、福音を伝えることを邪魔します。福音が語られ、人びとがその福音の言葉に耳を傾ける時、福音は人びとに届けられ、伝えられていきます。私たちの伝道とは、この福音の力によつて行われていきます。

主は小さな種でも、良い種であれば、三〇倍、六〇倍、一〇〇倍の実りをもたらしてくださいます。主イエスは、サマリアにおいて女一人に永遠の命に至る水について語られただけです。しかし、彼女を通じて、多くの人びとが福音を知ることとなりました。だからこそ私たちは、主の御前、礼拝の場において語られる福音の力を信じて、伝道を行います。人びとは、女のすべてをご存じであられたイエスこそが主、メシアであるとして信じました。信じるとは、救い主イエス・キリストと出会うことです。サマリア人たちは、女の語るイエス・キリストを受け入れ、救い主イエス・キリストと出会いました。

伝道は人の導きによつて行われます。しかし、人を通じての信仰に留まり続けていてはなりません。神を信じ救われるには、あなた自身が救い主イエス・キリストと出会うことが求められています。サマリア人たちは、最初は女の証言によつてキリストを知りますが、キリストこそが救い主であると、彼ら自身が御言葉によつて確認し信じました。

この時、もう福音を最初に語っていた女は関係ありません(四二節)。伝道とは、まさ

に罪赦された者が、感謝と喜びを人びとに伝えることによって行われるのですが、そのことによつて人びとが救われたことを一緒に喜ぶことはあつても、自らの手柄にしてはなりません。むしろ、そこから離れ、主の僕としての歩みが続けていけば良いのです。

私たちは、今から聖餐式に与ります。聖餐によつてパンとぶどう酒に与るのですが、聖餐に与ることは、昨日まで、この交わりの外のあつた人たちでも、キリストによる救いに入れられ、神の民として招き入れられた人たちならば、一緒に与ります。それが異邦人であるうが、罪人であるうが、民族・国籍が異なつていても、話している言葉が異なつても、性格・賜物が全く違つても、しかしキリストの十字架により罪が贖われ、罪赦され、義とされ、神の子とされた者であれば、皆、この聖餐に招かれています。この場に共に集つていない他の教会、他に居住している人たちも、神の国にあつては一緒に招かれています。キーワードは、福音を聞き、イエス・キリストの救いに導かれることです。

キリスト者は、自分自身が、永遠に生きる命の泉に満たされることにより、さらにまだこの場に招かれていない人に、ここがどれ程素晴らしい所であるかを伝え、一緒に聖餐に与ることができるように招くことです。

### 「あなたの息子は生きる」

ヨハネによる福音書四章四三〜五四節

二〇〇九年七月一九日

#### 序

主イエスと弟子たちは、サマリヤのシカルにおいて、女と多くの人々を救われ、二日間そこに滞在された後、再びガリラヤのカナに向かわれます。

#### I カナの記事を取り上げるヨハネ

カナは主イエスが婚礼の席で水をぶどう酒に変える奇跡を行った場所です（二章）。カ

ナは、他の福音書には出てこず、ヨハネのこの二つの箇所にししか出てきません。

ヨハネ二一章二節では「カナ出身のナタナエル」と記されています。つまりカナの記事は、このナタナエルが鍵を握っています。この主イエスの弟子ナタナエルも、他にはヨハネ一章四三節以降で、フィリポの友人として主イエスの弟子となったことが記されているだけです。

一方、主イエスと弟子たちは、ユダヤからサマリヤを経由してガリラヤに下つて来られたのですが、通過しているはずのナザレについても、カファルナウムについてもヨハネは語りません。五章に入ると主イエスは、再びユダヤのエルサレムに上つて行かれます。

こうしたことを考え合わせると、二章と四章にある二つのカナの記事は、主イエスの宣教師活動の初期の段階に行われた奇跡であり、それをヨハネはナタナエルから聞き取り、ヨハネがまとめて記しているのではないかと推測することができます。

#### II 人々の主イエスへの態度

さて、主イエスは自ら「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはつきり言われます（四四節）。「はつきりと言う」とは、「証言する」です。御言葉を語る使命を帯びる主イエスの生き方の厳しさが示されています。つまり神の御子として、本来は敬われて当然なお方です。しかし現実はその反対に、侮辱され、排斥され、迫害されます。つまりメシアとして受け入れられることはない、主イエスは御自身の口で語っておられるのです。

一方、ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人々はイエスを歓迎します（四五節）。おそらくカナの人々は、主イエスが前に行われた奇跡を知っていたのではないでしょう。この主イエスの証言と人々の歓迎の両極端な姿を、私たちは覚えておかなければなりません。主イエスがここで語られたことの真意が、後からはつきりしてきます。

#### III 役人の信仰

そうした中、カファルナウムにいた王の役人は、主イエスがカナに来られたことを知る

とカナに下つてきます。カファルナウムからカナは約三〇キロの道のりですから、当時は片道で一日を費やすほどの距離です。この役人がどれ程の決意で主イエスの所まで行こうとしたかを思い浮かべていただきたいと思えます。

彼の息子は病氣であり、医者にもさじを投げられていました。死んでいく子どもです。日本でも戦時中までは、子供は小さい頃に多くが亡くなっていました。だからこそ当時は、成人するまでは一人前の扱いをされることなく子どもは邪魔者でした。

しかしこの王の役員は、息子の命を助けようと動きまわります。時間をかけ、労苦しても、イエスならば癒すことができるだろうと信じての行動です。藁にもすがる思いです。

しかし主イエスは彼に何と語られたか？「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」（四八節）。役人に取って衝撃的な言葉です。この主イエスの言葉は、主イエスをメシアとして受け入れ信じようとするユダヤ人に対して語られた批判です。彼らは奇跡を見ても信じません。出エジプトの時がそうでした。繰り返した御業を見ながら、彼らはモーセがシナイ山に登りいなくなると、偶像を造りました。主イエスは最初にカナで奇跡を行います。それに人々は賞賛し、主イエスを歓迎します。しかし彼らの多くは、主イエスをメシアとして受け入れることはできませんでした。

一方サマリアでは、罪人とされてきたサマリア人は、誰一人ユダヤ人である主イエスを歓迎することはありませんでした。しかし、一人の罪深い女が生きた水を得て、信仰に導かれたことをきっかけに、多くの人々が主イエスを信じて、信仰を告白しました。

主イエスは役人に問いかけられます。この役人は、この時は人々に奇跡を行うこともしていない主イエスを信じていました。つまり彼の行動は、ガリラヤのユダヤ人たちではなく、むしろ異邦人であるサマリア人の姿と重ね合わせることで、行われるべき行為です。そして彼は、主イエスの言葉に対して怒ったり、あきらめることなく、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と願ひ続けます。信仰・祈りとは、忍耐が必要な時もあります。こうして主は、私たちの信仰を確認し、また私たちの信仰を養ってくださいます。

信じることは、継続的であり、永遠に続くものです。一時的に信じてても、祈りがかなえられなければあきらめる、信じることを止めるのは、真の信仰ではありません。半信半疑に祈り続けるものでもありません。あきらめずに信じることを求められます。私たちは、有神論的人生観世界観の下に生きています。「飲むにも、食べるにも、何をすることも主の栄光のために行う」（Iコリント一〇章三一節）のであり、主なる神は常に私たちと共にいてくださいます。もちろん、信仰も山あり谷あり、神を信頼しきっている時もあれば、疑いつつ半信半疑になることもあるでしょう。しかし、それでもなお主なる神は私たちと共にいてくださり、最後に私たちの祈りは聞き届けられます。そのことを信じて私たちは祈り続けることが求められています。

この役人の信仰告白に対して、主イエスは「帰りなさい。あなたの息子は生きる」と語られます（五〇節）。そうすると、役人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行きま

す。ここに私たちの求めるべき信仰があります。ヨハネは、主イエスが十字架の死から復活した時、主イエスの復活を信じなかったトマスについても語っています（二一章二四〜二九節）。しるし・奇跡を見ることによって信じるのではなく、見ないのに主がお語りになる御言葉を受け入れ、信じる者であることが私たちに求められています。